

モンゴルにおける「白いスウルデ」の継承と祭祀

楊 海 英*

- | | |
|------------------------------------|-----------------------|
| 1 はじめに | 3.3.2 祭祀職掌 |
| 2 「白いスウルデ」の歴史的背景とそれに関する従来の見解 | 4 「白いスウルデ」の祭祀 |
| 2.1 史書に見る「白いスウルデ」 | 4.1 祭祀の期日と名称 |
| 2.2 モンゴル各地に存在した「白いスウルデ」 | 4.2 「白いスウルデ」の「血祭」 |
| 2.3 「白いスウルデ」に関する報告と研究 | 4.3 供物ジュマをあつかう職掌 |
| 2.4 現在の「白いスウルデ」の実態 | 4.3.1 文献に見る「ジュマ宴」 |
| 3 「白いスウルデ」の祭祀者集団 | 4.3.2 民族誌から見た供物ジュマ |
| 3.1 チャハル・モンゴル族としての出自 | 4.3.3 ジョリクという職掌 |
| 3.2 オルドス地域に定着した後のチャハル部とガルハタン部のとの関係 | 4.4 テキストに見る「白いスウルデ」祭祀 |
| 3.3 チャハル部内の父系親族集団とその職掌 | 4.4.1 テキストの入手経緯 |
| 3.3.1 父系親族集団 (oboy) | 4.4.2 朗唱されるテキスト |
| | 4.4.3 秘唱されるテキスト |
| | 4.4.4 その他のテキスト |
| | 5 おわりに |

1 はじめに

モンゴル族には、古くから幡類を祭る習慣がある。幡類の呼び名には、スウルデ (sülde) とトゥク (tuy 纛), ダルバー (dalby-a) の3つがある。ウラジミルツォフは、スウルデとは、人間の魂 (sür) がやどっている神器であろうとみなしている (ウラジミルツォフ 1941: 330)。モスタールトは、スウルデを「守護神」とする (Mostaert 1942: 598)。エルケセチェンは、スウルデとトゥクの区別を厳密に述べている。それは、大ハーンの旗幡をスウルデといい、父系親族集団 (oboy torül) や軍

* 中京女子大学人文学部, 国立民族学博物館共同研究員

Key words: Ordus Mongols, The White Sülde (The White flag), flag bearer, Manuscripts

キーワード: オルドス・モンゴル, 白いスウルデ, 旗手, 祭祀文書

隊，諸種の団体機関の旗類をトゥク，個人が立てる旗類をダルバーという (Erkesečen 1991: 7)。現代モンゴル国憲法では，スウルデは，国家徽章 (*törü-yin sülde*) を意味する (『Mongyol Ulus-un Ündüsün Qauli』1992: 43)。

内蒙古自治区のオルドス地域に3種のスウルデがある。それは「黒いスウルデ」(*qar-a sülde*)，「まだらのスウルデ」(*alay sülde*)，「白いスウルデ」(*čayan sülde*) である。「黒いスウルデ」は現在同地域のエジン・ホロー旗 (旧ジュン・ワン旗) にあり (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 280–329; 楊 1995b: 41–49)，「まだらのスウルデ」はかつてオトク旗のナンソク寺の近くにあった (Van Hecken 1963: 150; Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 334–340; Qurčabayatur & Üjüm-e 1991: 74–83) が，1956年以降祭祀は中断されたままである。「白いスウルデ」はウーシン旗にある。「黒いスウルデ」については，すでに詳しい記述報告があり (Sayinjiryal & Šaraldai 1983)，私もその祭祀に関する若干の試論をおこなった (楊 1995b)。「まだらのスウルデ」については，いまだに簡単な報告にとどまっている (Qurčabayatur & Üjüm-e 1991: 74–83)。本論文では「白いスウルデ」をとりあげる¹⁾。

オルドスの民間伝承では，「黒いスウルデ」はチンギス・ハーンの軍神で，ハーンは戦争に赴く際にそれを携えた。平和なときには「白いスウルデ」を立てたという (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 280–281)。「まだらのスウルデ」はチンギス・ハーンの弟，ハプト・ハサルのスウルデであったと伝えられている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 334–335)。ここでは「黒と軍」，「白と平和」，「まだらと特定人物」をそれぞれ結びつけている。

オルドス・モンゴル族は，日常生活のなかで，スウルデとトゥクを同一の意味で使うことが多い。「黒いスウルデ」と「白いスウルデ」をそれぞれ「黒いトゥク」，「白いトゥク」とも呼ぶ。研究者による幡類名称の使用区分を見ると，エルケセチェンは，1989年の論文では，「白いトゥク」と表現し (Erkesečen 1989: 43–53)，1991年の報告では，「白いスウルデ」に統一している (Erkesečen 1991) 一方，サインジャラガルは，「白いスウルデ」としている (Sayinjiryal 1992: 29–38)。本論文では，原則として「白いスウルデ」に統一し，原著者のニュアンスに関わるところは原著どおりとする。

「白いトゥク」について，『モンゴル秘史』第202節に記述がある。それは，1206年にテムジンがオノン河のほとりで「白いトゥク」を立てて大ハーンの位に即き，チンギス・ハーンの称号を与えられた，というところに登場する (Eldengtei & Ardajab 1986: 660)。「白いトゥク」は大ハーンの即位とかさなっており，モンゴル史上，き

わめて重要な存在であったことがわかる。『モンゴル秘史』以来、モンゴル人が編著した史書では、ほとんどチンギス・ハーン即位時の「白いトゥク」に言及している²⁾。

チンギス・ハーンの祭殿「八白宮」の祭祀は、おそくともフビライ・ハーン治世下の元朝時代に、勅命に基づいて制度化されたと見られている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 23-27)。近年の研究によって、フビライ・ハーンやホトクタイ・セチェン・ホン・タイジらが編纂したとされる『十善白史』が、チンギス・ハーン祭祀の理論的根拠となっていることが明らかになった (井上 1992: 14; 楊 1995b: 27-54)。『十善白史』が「9大象徴」(*yisün yeke belge*) とする聖物 (留金鎖 1981: 85) には、「黒いトゥク」が筆頭にあがっている。私は、「9大象徴」はおそらく現在まで維持されてきたチンギス・ハーンの8つの遺品からなる祭殿「八白宮」と軍神「黒いスゥルデ」(黒いトゥク)の原型であろうと想定している。「9大象徴」には、「白いスゥルデ」は含まれておらず、『十善白史』にも「白いスゥルデ」の祭祀に関する記述はないのである。

八白宮の祭祀者は、「五百戸の黄色いダルハト」と称し、東西2つのグループに分かれる (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 413-462; 楊 1995b: 31-34)。祭祀者ダルハトはチンギス・ハーンの8つの遺品だけでなく、軍神「黒いスゥルデ」も含め、9つの聖物を祭る (Sayinjiryal & Šaraldai 1983; 楊 1995b)。ダルハトの約半分は軍神「黒いスゥルデ」の専属祭祀者である。「黒いスゥルデ」の祭祀活動は、チンギス・ハーン祭祀体系のなかでも大きな比重を占めている。このような八白宮の祭祀構成は、「9大象徴」の1つである「黒いスゥルデ」が八白宮に吸収された形になっている。

オルドス・モンゴル族は、古くからチンギス・ハーンの祭殿八白宮と軍神「黒いスゥルデ」の祭祀活動を維持してきた。換言すれば、八白宮と「黒いスゥルデ」の祭祀を挙行するために、オルドス・モンゴル族という特別な集団が形成されたのである (楊 1995a)。

「白いスゥルデ」の祭祀者集団は、現在では誰もが「オルドス・モンゴル」と自称しているが、オルドス・モンゴル族とは異なった歴史をもつ。かれらはチャハル・モンゴル族の子孫である。チャハル・モンゴル族はモンゴル最後のハーン、リクダン・ハーン直属の万戸集団で、満州族の後金国にもっとも激しく抵抗した集団であった。かれらは17世紀前半に、モンゴル各部があいついで後金国の支配下に入った時点で、オルドス地域に住むようになり、現在に至っている。このように、現在ではオルドス地域ウーシン旗で維持されている「白いスゥルデ」には、八白宮や「黒いスゥルデ」とは完全に別の歴史的背景がある。

モンゴルにおける政治祭祀を研究するにあたって、チンギス・ハーンの祭殿八白宮と軍神「黒いスゥルデ」に注目するのは当然のことであろう。それだけでなく、「白いスゥルデ」祭祀を研究し、究明することも、同じく重要な意義をもつ。以下では、オルドス地域出身の民俗学者の諸記述報告をふまえながら、私自身が1991年から1992年にかけておこなった実地調査と1997年春の調査を中心に、「白いスゥルデ」の祭祀者集団およびかれらが維持している祭祀活動の実態について、試論を展開したい。「まだらのスゥルデ」に関する研究は、私のつぎの課題としたい。

2 「白いスゥルデ」の歴史的背景とそれに関する従来の見解

エルケセチェンは「白いスゥルデ」の祭祀者集団の1人で、長年にわたって「白いスゥルデ」祭祀について調査をかさねてきた。エルケセチェンによると、17世紀半ば以降、モンゴル人歴史家たちは「白いスゥルデ」に注目するようになり、18世紀以降はとくに「白いスゥルデ」の原型について各種多様な推論が出されるようになったという (Erkesečen 1989: 43)。ここではエルケセチェンの見識を紹介しながら、モンゴル人歴史家の筆下に登場する「白いスゥルデ」について通観してみたい。

2.1 史書に見る「白いスゥルデ」

オルドスの歴史家サガン・セチェン・ホン・タイジの『蒙古源流』には「9脚の白いトゥク」(*yisün köl-tü čayan tuy*) とある (Sayang Sečen 1956: 71)³⁾。また、1635年⁴⁾ ころに書かれた『黄金史』(Altan Tobči) にも「9脚の白いトゥク」(*jisün költü čayan tuy*) とある (Čoyiji 1983: 160)。1677年ころに成書した『アサラクチ史』(Asarayči Neretü-yin Teüke) には、チンギス・ハーンが「9脚の白いトゥク」をジャライル部のムカライ国王に授けた、とある (Bayan-a 1984: 47)。1834年から1837年のあいだに書かれたとされる『水晶鑑』(Bulur Toli) には「8脚の白いトゥク」としている (ĴimbadorĴi 1984: 404)。また、1835年ころに書かれた『水晶珠』(Bulur Erike) には「9つのマンジラガをもつ白いトゥク」(*yesün manĴilyatu čayan tuy*) との語句が見られる (Rasipungsuy 1985: 54)。「マンジラガ」(*manĴily-a*) とは垂れ房のことであろう。1817年に書かれた宗教史的性格が強い『金鬘』(Altan Erike) には「9つのグクールをもつ白いスゥルデ」とある (Na Ta 1989: 24)。「グクール」(*kögel* あるいは *kögül*) とはウマのたてがみで造った垂れ房のことであろう。以上の諸記述から、2点の相違を発見できる。1つは、「白いトゥク」の「脚」で、9とも

8ともある。もう1つは、「脚」ではなく、「マンジラガ」,「グクール」や「クグール」との描写である。エルケセチェンの分析では、17世紀までの歴史家の記述はほとんどが「9脚の白いトゥク」としているのに対し、それ以降はしだいに多様化しはじめたという (Erkesečen 1989: 51)。

以上のような「白いスウルデ」(白いトゥク)に関する記述の不一致もあって、後世の研究者たちのあいだでも、とくに「白いスウルデ」の原型についての見解が分かれるようになった。村上は「9脚」の「9」はモンゴルの吉数であるとしたうえで、「九つの吹流しの尾をつけた白い旌旗」と訳している (村上 1977: 342, 347)。サインジャラガルが「8脚」と見ているのは、中心の主要なスウルデを除いているからである。すなわち、周囲に立つ8本の小スウルデからの命名である。歴史家のあいだでこのような混乱が発生したのは、「白いスウルデ」の祭祀儀礼、祭祀者集団の職掌を知らないうえ、なによりも「黒いスウルデ」,「白いスウルデ」,「まだらのスウルデ」の3者の区別がつかないことから生じたものと見ている (Sayinjiryal 1992: 29-30)。

『黄金史』には「赤褐色の種雄ウマのたてがみでつくったあなた (チンギス・ハーン) のトゥクとスウルデ」(*keger ajiryan-u kögöl-iyer kigsen tuy sülde činu*) とある (Čoyiji 1983: 506) ことから、「白いスウルデ」の「脚」は、ウマのたてがみか尻尾でつくったと見られるようになった (Mostaert 1957: 548-549)。

エルケセチェンは、現在オルドス・ウーシン旗にある「白いスウルデ」の形とその祭祀を詳細に記述し、チンギス・ハーンが「白いトゥク」を即位の際に立てたことから、八白宮よりも早く「白いトゥク祭祀」が存在していたはずであると唱えている (Erkesečen 1989: 52)。「9脚の白いスウルデ」とは、物体としての9本の支え柱や9本の引き綱ではなく、9人の将軍の鼎力を借りて建てられたモンゴル帝国の国旗であったため、「9脚」と結びつけて表現するようになった。「9脚」とは9人の将軍を象徴するものであったという (Erkesečen 1989: 52)。エルケセチェンはさらに、上述の歴史家のうち、オルドス出身のサガン・セチェン・ホン・タイジは「白いスウルデ」の歴史を当然知っていたであろうのに、その著作のなかで一切触れていないのはたいへん不思議であるとの疑問を示している (Erkesečen 1989: 51)。

2.2 モンゴル各地に存在した「白いスウルデ」

「白いスウルデ」は、かつてモンゴルの各地で祭られていた。ロシアのモンゴル学者ウラジミルツォフはハルハ・モンゴルの西部にあった「白いスウルデ」の祭祀を観察している (ウラジミルツォフ 1941: 331)。ウラジミルツォフが見たのは、ジャサ

クト・ハン部のロー・ジャンジュン・グン旗 (lubsangdandub jangjun güng-ün qosiyu) にあった「白いスウルデ」である。現在ここは、モンゴル国ウブス県南東部のウンドゥル・ハンガイ・ソムとなっている⁵⁾。

私は、1993年8月にウンドゥル・ハンガイ地域を訪れ、ソム政府の長官らからこの地にあった「白いスウルデ」に関する情報を得ることができた。「白いスウルデ」は、「8脚の白いトゥク」と呼ばれており、トゥクとスウルデを同じ意味で使っていた。3年に一度秋に大祭があり、祭祀のことを「スウルデを喜ばせ、トゥクを祭る」(sülde čenggekü tuy takiqu) という。

「白いスウルデ」にはかつて世襲の祭祀者が32人おり、祭の日にはみな白い服装を身にまとい、白馬に跨ったという (Tümenjiryal 1989: 33-36; Čingel 1992: 161)。『モンゴル風俗習慣大辞典』では、「白いトゥク」を「白いスウルデ」と呼んでいる。「白いスウルデ」はチンギス・ハーンの子、チャガダイのスウルデで、モンゴル帝国の首都カラ・コルムの近くからウンドゥル・ハンガイ地域へ移されたという。その祭祀者にはつぎのような職掌があった (Čingel 1992: 161)。

旗手 (tuyči)

儀式の進行係? (söngčün)

木碗もち⁶⁾ (ayayačün)

「白いスウルデ」は現在モンゴル国の国立歴史民族博物館に保存されている。そのうち最後の旗手は「天」を氏族とする (tengri oboγ), ムンクダライという人物であった (Čingel 1992: 161)。別の資料では、ムンクダライは1963年に「白いスウルデ」祭祀に関する文書をモンゴル国の中央博物館に提出したという (Tümenjiryal 1989: 33-34)。

また、リンチンが編集したシャマニズム関係のテキストには、「ロー・ジャンジュンの旗にあるスウルデを喜ばせる作法および祭史」(Lu jangjun-u qosiyun-u sülde čenggekü yosun öčig) というテキストが収録されている (Rintchen 1975: 45-48)。テキストには、祭祀のやり方や祭祀者の職掌に関する内容がある。具体的には以下の職掌が見られる (Rintchen 1975: 48)。

旗手 (tuyči) 1人

尻繫役? (quduryači) 1人

英雄 (bayatur) 8人

槍者? (čečed) 4人

先鋒 (qosiyučı) 4人

相撲の行司? (jasayul) 4人

先鋒歩哨 (mangnai qarayulči) 2人

このほかに、サインノヤン・ハン部のエルデニ・ジョー寺の近く、その南のバルーン・クレーというところでも「白いスゥルデ」が祭られていた。ここでは「白いスゥルデ」のほかにまたチンギス・ハーンの軍隊の喇叭とされるものを保存していた。その祭祀者はラマ僧であった (Čingel 1992: 160-161)⁷⁾。エルデニ・ジョー寺はカラ・コルムの跡地に建てられている。カラ・コルムの近くからウンドゥル・ハンガイ地域へ移された「白いスゥルデ」と、エルデニ・ジョー寺近くで祭られていた「白いトゥク」が、どういう関係にあるか、私はまだ確認できていない。

内モンゴルでは、オルドスのウーシン旗のほか、シリーン・ゴル盟のアバガ旗にも「白いスゥルデ」が祭られていた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 342-344; Sayinjiryal 1992: 31)。現在のところ、このアバガ旗の「白いスゥルデ」に関する詳しい情報は得られていない。なお、現在祭祀がおこなわれているのは、オルドス・ウーシン旗の「白いスゥルデ」のみである。

2.3 「白いスゥルデ」に関する報告と研究

ロシアのブリヤート・モンゴル人学者ジャムツァラーノが1909年から1910年にかけてオルドスを旅行した際、「8脚の白いスゥルデの祭祀」(*naiman költü čayan süldeyin takily-a inu*)と題する祭祀文書を収集している (Rintchen 1959: 71-73)。オルドスではウーシン旗以外に「白いスゥルデ」が存在しないことから、ジャムツァラーノの文書を現在ウーシン旗にある「白いスゥルデ」と結びつけて考えることができよう。

近年、ウーシン旗の「白いスゥルデ」について、いくつかの調査報告が出されている。なかでもエルケセチェンの報告はきわめて価値の高いものである。エルケセチェンはまず1989年に雑誌『内蒙古社会科学』に「白いトゥク」(白いスゥルデ)に関する論文を公表している (Erkesečen 1989)。これはかれ自身の幼少期以来の経験と長年にわたるウーシン旗の祭祀者たちにインタビューした成果である。エルケセチェンは、「白いトゥク」祭祀における各種儀礼を考察した後、ウーシン旗の「白いトゥク」はまさにチンギス・ハーンが大ハーンの位についたときに立てた国旗たる「白いトゥク

ク」か、もしくはその「直系変種」であろうと結論している (Erkesečen 1989: 49)。その後エルケセチェンは、1991年に『黄金スウルデの祭祀』(Altan Sülde-yin Tayily-a) と題するガリ版印刷の報告書をウーシン旗文史資料の第15輯として公開している (Erkesečen 1991)。報告書には「白いスウルデ」の祭祀者集団の歴史、祭祀状況、それに各種祭詞などが含まれている。

サインジャラガルも1992年に「白いスウルデ」に関する論文を発表している (Sayinjiryal 1992)。サインジャラガルは、エルケセチェンの調査報告を参照しながら、みずからの実地調査資料も加え、エルケセチェンと同じように、「白いスウルデ」はモンゴル帝国の国旗であったと位置づけている (Sayinjiryal 1992: 31-35)。

ベルギー出身のモンゴル学者モスタールト神父は、オルドス西部のオトク旗とウーシン旗に20年間居住した (Françoise 1972: 218-220; Poppe 1971: 164-169)。モスタールトは、ウーシン旗のナリーン・ゴル河に住むドガール・ジャプ・タイジという人物から文書を収集している (Mostaert 1956: 61)。「白いスウルデ」は、このドガール・ジャプ・タイジの家から約15キロメートル離れたところにある。モスタールトは、オルドス・モンゴル族の父系親族集団 (oboy) に関する論文のなかで、「白いスウルデ」の祭祀者集団旗手トゥクチをその複数形トゥクチナルと表現したうえ、旗手を八白宮の祭祀者集団ダルハトのなかの1クランであるとしている (Mostaert 1934: 24, 39)。確かにダルハトのなかにも旗手と称する職掌はあったが、オルドスでは、トゥクチナルといえは、通常は「白いスウルデ」の祭祀者を指すのである。モスタールトはまた、「白いスウルデ」の祭祀者集団チャハル・ハラーのモンゴル人にも言及しているが、これらの祭祀者集団が直接「白いスウルデ」を祭っていることには触れていない。これはまた『蒙古源流』の作者サガン・セチェン・ホン・タイジとその祖父ホトクタイ・セチェン・ホン・タイジの祭祀に関する論文のなかで、「サガン・セチェン・ホン・タイジのスウルデ」については記述しており、オルドスには他にも「黒いスウルデ」、「まだらのスウルデ」と「白いスウルデ」、あわせて3種のスウルデがあると記している。「白いスウルデ」がどの旗にあるかは知らないと認めている (Mostaert 1957: 548)。当時「白いスウルデ」はモスタールトの観察したサガン・セチェン・ホン・タイジのスウルデから東へ約50キロメートル離れたところにあった。モスタールトの収集した数多くのオルドス関係の文書 (Serruys 1975: 191-208) のなかには、「白いスウルデ」祭祀に関する文書はないようである⁸⁾。

2.4 現在の「白いスウルデ」の実態

「白いスウルデ」は現在ウーシン旗のムー・ブラク⁹⁾にある。高さ13尺の鉄製の三叉を中心に、両側を高さ9尺の小スウルデと槍 (*jida*) でかこみ、灌木でつくった垣内に立ててある。垣の外側にはキ・モリが1本立てられてある。キ・モリとは「空気のウマ」、「希望のウマ」の意味である。キ・モリは、鉄器のスウルデに雄ウマのたてがみをつけ、チベット語の呪文を刷った布切れを掲げたものである (Sonom 1984: 152-170)。

「白いスウルデ」の外観について、旗手であるエルケセチェンの記述 (Erkesečen 1989: 45-46) を要約すると、以下のとおりである。

東西一列に並んだスウルデと槍の相互間の距離は約1尺である。中心の大きなスウルデの形としては、竿の先に鉄製金鍍金のスウルデをつけ、スウルデの下には木製の円盤をつけたものである。円盤の直径は約1尺で、厚さは1寸である。円盤の外側に白い種雄ウマのたてがみを巻き、さらにそのうえに白いフェルトを巻きつける。白いフェルトは銅製の円環で固定させる。この円盤は「帽子」(*malay-a*) という。エルケセチェンが記録した他の祭祀者旗手たちの見方では、中心のスウルデの高さを13尺にするのは、「チンギス・ハーンが平和なときに宮帳オルドの前に立てていたときから13尺であった」伝統を守るためであるという。「白いスウルデ」がムー・ブラクの地を離れて各地を巡回する際には、小スウルデだけを旗手たちがもって出かける。この際、小スウルデは中心の大きなスウルデの使者 (*elci*) になる。小スウルデと槍はチンギス・ハーンの9人の将軍が手にしていたので、その高さは9尺にしているとの解釈である (Erkesečen 1989: 45-46)。13と9はモンゴルにおける聖数である。「白いスウルデ」の寸法は、聖数概念と結びついている。

槍の方には青色で縁とりをした幅約3尺の白い幡が掲げてあったという。この白い幡は元来中心のスウルデから掲げていたようであるが、現在では代わりに仏画を掲げることになっている (Erkesečen 1989: 45-46)。

「白いスウルデ」の近くには1つの簡易テントがあった。なかには弓1張、赤い矢13本、白い矢13本、古代の剣1振、鎧1領、火縄銃1挺、招福用の矢 (*dalalyan sumu*) 1本、それに祭祀用の文書と『紅史』、『白史』など「五色の史書¹⁰⁾」が保存されていたという。火縄銃は1870年代にオルドスに侵攻した回族反乱軍を撃退するのに使用されたものである (Erkesečen 1991: 29-30)。このことから見れば、祭祀に使用される道具と神聖視される遺品はつぎからつぎへと変化したことがわかる。



写真1 エルケセチェンが復元させた「神の肖像」

エルケセチェンの1991年の報告によると、「白いスウルデ」の遺品のなかにはもう1枚古代の絵が保存されていたという。それは、幅1尺、長さ約2尺あまりの布地に鎧甲と剣で武装した騎馬将軍を中心に、その前方には「白いスウルデ」を手に淡黄色のウマ（シャルガ）に跨った人物が描かれたものであった。武装人物の前後には無数の兵士たちの行軍姿が描かれていた¹¹⁾。この絵は祭祀の日だけにスウルデに掲げていた。旗手たちはこの絵を「神の肖像」(*burqan kürüg*)と呼んでいた(Erkesečen 1991: 29-30)。「神の肖像」と上述の「仏画」とは異なるものであった。1992年春に私が調査していたとき、「神の肖像」は、1960年代の文化大革命のころに没収されたとの情報を聞いた。1997年3月に、エルケセチェンを訪ねたところ、「神の肖像」はエルケセチェンらによって復元されていた(写真1参照)。

以上述べてきたように、エルケセチェンらは、歴史上の「白いスウルデ」に関するモンゴル人歴史家のさまざまな記録を検討しながら、「白いスウルデ」の形態およびその祭祀を詳細に報告している。次章では、私自身の調査資料をもとに、上述の報告資料を参考しながら、現在オルドス・ウーシン旗にある「白いスウルデ」について論じたい。また、チャハル・モンゴル族を出自とするこれらの祭祀者集団に関する資料と伝承を検討し、かれらとオルドス・モンゴルのガルハタン部との関係に注目する。祭祀者集団を構成する父系親族集団とその職掌を整理する。

3 「白いスウルデ」の祭祀者集団

オルドスでは「白いスウルデ」をまた「チャハル部の白いスウルデ」あるいは「旗手たちの白いスウルデ」と呼ぶ (Erkesečen 1989: 44)。これは、旗手たちはチャハル・モンゴル族を出自とする集団であることを表している。本章では、旗手と称するチャハル・モンゴル人の歴史的背景について検討する。

3.1 チャハル・モンゴル族としての出自

エルケセチェンの報告では、旗手と称するチャハル・モンゴル人たちはチンギス・ハーンの時代から「白いスウルデ」を祭り、もとは大ハーンの親衛部隊ケシクの一部であったという (Erkesečen 1991: 5)。祭祀者旗手たちは八白宮の祭祀者集団ダルハトと同じく、大ハーンから特別の恩賜ヤム (*yamu*) を授与されていた人びと、すなわちヤムタンであったという (Erkesečen 1991: 30–31)。ヤムとは、「尊い食べ物」との意味である。チンギス・ハーンの八白宮祭祀 (Qurčabilig 1994; 楊 1995b)、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンの祭祀において、ヤムは特別の恩賜として祭祀者に分配される (楊 1997: 660–663)。

これらのチャハル・モンゴル人が、どのような経緯でオルドス部に組みこまれたかについてまとまった記録はない。モスタールトは、かれらはおそらく1627年にオルドス部とリクダン・ハーンのチャハル部が趙城で戦い、チャハル部が破れた際の捕虜か、リクダン・ハーンが西の青海地方で逝去した後、1635年にその息子エルケ・ホンゴルが部属を率いてオルドスで後金国軍に投降した際の残留者か、といった2つの可能性を示唆し、前者の可能性が強いとしている (Mostaert 1934: 39; 1956: 24)。一方和田は、いわゆる「趙城の戦い」は、存在しなかったことを立論している (和田 1959: 889–897)。和田の論考に森川も賛同し、チャハル部とオルドス部との関係が良好であり、オルドス部の支配者層は、リクダン・ハーンのモンゴル統一事業に協力的で、衝突したことはないと主張している (森川 1990: 50)。清朝側の資料によると、エルケ・ホンゴルの率いるチャハル部が後金国軍に接収される以前、その一部の臣民は当時のオルドス部のリンチン・ジノンによって無断で分割されていたという。後に後金国軍の脅迫を受けたリンチン・ジノンはチャハル・モンゴル人千戸あまりを引き渡している (趙 1976: 14373)。

エルケセチェンとサインジャラガルは、リンチン・ジノンに関するつぎのような民

間伝承を記録している。伝承では、後金国に「無断で」チャハル部の一部を「分割」したオルドスのリンチン・ジノンは、疲弊したチャハル・モンゴル人の保護者として登場する。つまり、王子エルケ・ホンゴルについて後金国側に下るのに抵抗した数千人のチャハル・モンゴル人は、オルドスにある「八白宮の側」に居残り、そのなかに「白いスゥルデ」の祭祀者たちも含まれていたという¹²⁾。その後1649年にオルドス部に盟・旗制度が導入された際、チャハル・モンゴル人たちはウーシン旗旗王の管轄下に移された。かれらはチャハル・ハラールという行政組織を形成し、4つのソム¹³⁾に編入されていた(Erkesečen 1991: 5; Sayinjiryal 1992: 32)。この伝承は、私がオルドスで調査した際も、旗手たちをはじめ、ウーシン旗の多くのモンゴル人から聞いた。伝承はオルドスではむしろ史実として受けとめられている¹⁴⁾。この伝承のなかで、チャハル・モンゴル人たちは、自分たちはモンゴル帝国の国旗「白いスゥルデ」の旗手であること、清朝への投降を拒否し、オルドスにあるチンギス・ハーンの祭殿八白宮に精神的支援を求めて居残ったことを表明している。

オルドス地域に居残ったチャハル・モンゴル人は、最初オルドス南部、長城のクヌク・ホト(波羅堡)の北部にあるスゥルデ・イン・オライ地帯で放牧していた。スゥルデ・イン・オライとは「スゥルデのある峠」との意味である。これらのチャハル・モンゴル人は、つねに厳しい監視下にあった¹⁵⁾。かれらは、最初モンゴル帝国の国旗「白いスゥルデ」を所持していたことを厳密に隠していたという(Erkesečen 1991: 5)。康熙晩年、ウーシン旗は旗内10のハラール組織¹⁶⁾にそれぞれオヴォ1、寺院1、スゥルデ1本を建てることになり、チャハル・ハラールもこの機会に「白いスゥルデ」を立てて祭ることになった(Erkesečen 1991: 13)。

19世紀末から漢族の大量入植を受けて、チャハル・モンゴル人たちは北へ移動しはじめるが、地名はそのまま残り、現在漢族らはこの地を「旗竿梁」と呼ぶ。これはスゥルデ・イン・オライの漢語訳である。かれらは無定河の雷龍湾に5年間ほどとどまった後、またも漢族に圧迫されて、ついに無定河を渡り、一部はトゴトゥ、一部はシルデク¹⁷⁾へと離散していった。トゴトゥの集団は1935年ごろにさらに北上して、トリの南あたりまで達し今日にいたる。「白いスゥルデ」は旗手たちと一緒に移動した。旗手たちが長城のクヌク・ホト(波羅堡)の北側で放牧していたころ、「白いスゥルデ」はスゥルデ・イン・オライで約200年間祭られていた。漢族の進出によってムー・ウスン・タラ(楊家梁)に移り、ついで1902年から2年間クブシ・イン・ブラクにとどまり、1904年に現在のムー・ブラクに移ったという(Erkesečen 1991: 5-6)。旗手たちは1986年にふたたび「白いスゥルデ」を立て、祭祀を再開した。サインジャラガ

ルは、現在ウーシン旗には約170戸の旗手がいるという (Sayinjiryal 1992: 32)。1991年から翌年にかけて私が調査したところでは、旗手たちは主としてウーシン旗南西のトゴトゥ、ムクル・チャイダム、シニ・スゥメ寺、ムー・ブラク、それに同旗西部のシルデク、オンゴン、ギラトなどに分布している。

3.2 オルドス地域に定着した後のチャハル部とガルハタン部との関係

チャハル・ハラーを含め、ウーシン旗には計10のハラー組織があった。そのうち、チャハル・ハラーとガルハタン (yarqatan) ・ハラーのみが「白いスゥルデ」祭祀に積極的に参加していた。他の8つのハラーが参加しない理由については、誰もが「満州清朝のチャハル・ハラーに対する監視が厳しかった」ことをあげる。なぜ、ガルハタン・ハラーだけが特別な行動をとったのであろうか。以下では、ガルハタン・ハラーとチャハル・ハラーとの関係について考えたい。

ガルハタンは、オルドス西部の大きな父系親族集団の1つである。かれらは現在主としてウーシン旗の東部と北部、オトク前旗のオルジャチ鎮周辺に分布している。ウーシン旗に住むガルハタン部の複数の長老は私に、ガルハタン部はもともと『蒙古源流』の著者サガン・セチェン・ホン・タイジの直轄の集団であったと語った。ガルハタン部の人びとは、清朝時代ほぼそのままガルハタン・ハラーに改組された後も、自分たちは、サガン・セチェン・ホン・タイジの子孫たちに統轄されていたという。

ガルハタン部についてまた別の伝承がある。それは、ウーシン旗のガルハタン部は旗王直属の軍隊であったという。ウーシン旗東部に住むガルハタン部の長老によると、1670年代ころ、ウーシン旗の第2代旗王ダルジャイは、軍を率いてマーシン (定辺県)、ウラーン・タルキ (花馬池) の回族の反乱を鎮圧したあと、そのまま長城の南側で放牧していたという。後にダルジャイ王はベーラ (貝勒) に昇進し、ガルハタン部は長城の北側に移され、ジャンバ平野 (現在の張家畔) からサントリー・ホト (神木堡) の北にあるボダンまでの広い範囲内で放牧するようになった¹⁸⁾。この伝承は、ガルハタン部のウーシン旗東部、北部への移転の原因を示している。

モスタールトは、『蒙古源流』研究の序説で、その著者サガン・セチェン・ホン・タイジの生涯について、詳細に考察している。そのなかでモスタールトは、オルドスの民間伝承をも参照しながら、1634年以降のあるとき、サガン・セチェン・ホン・タイジの子孫はウーシン旗北部へ移された後、ガルハタン・ハラーに編入されたと推察している (Mostaert 1956: 28)。ガルハタン部とチャハル部との関係は、ある意味では、サガン・セチェン・ホン・タイジとチャハル部との関係ともいえよう。

サガン・セチェン・ホン・タイジは少壮のころ、モンゴル最後の大ハーン、リクダン・ハーンに追随したことがある。『蒙古源流』の記述を見る限り、サガン・セチェン・ホン・タイジはリクダン・ハーンに非常に同情的である¹⁹⁾ばかりでなく、満州族によるモンゴル支配についても著作のなかで文墨を多としない堅い原則をもっている (Mostaert 1956: 25-27)。モスタールトの研究にそって、当時のモンゴル全体とオルドスの情勢を見てみよう。チンギス・ハーンの八白宮は1632年リクダン・ハーンによって西の青海へ移されているが、リクダン・ハーンの死後1634年に、オルドスへ返還されている。1634年から1635年にかけて、リクダン・ハーンに追随していたチャハル部はつぎつぎとオルドスを通して後金国へ投降していく (Mostaert 1956: 20-21)。モスタールトの分析どおり、サガン・セチェン・ホン・タイジのような由緒ある貴族にとって、異民族に支配されることに無関心ではいられなかったにちがいない (Mostaert 1956: 27)。

サガン・セチェン・ホン・タイジは、オルドス部の著名なリーダー、ホクタイ・セチェン・ホン・タイジ (1540-1586) の長子、ウルジイ・イルドゥチ・ダルハン・バートルの長孫である。清朝による盟・旗制度がオルドスで確立された際、ウーシン旗の長官ジャサクに選ばれたのは、名門出身のサガン・セチェン・ホン・タイジではなく、ホクタイ・セチェン・ホン・タイジの弟で、政治力のないブヤンダラ・ホラーチ・バートルの曾孫エリンチンである。和田は、サガン・セチェン・ホン・タイジは、リクダン・ハーンに好意を表したため清朝の信頼を失い、ウーシン旗の王位は、別の系統に移ったと見ている (和田 1959: 721; 746)。森川は、清朝のこうした選定政策は、サガン・セチェン・ホン・タイジの心情に影響を与えたかもしれないと指摘している²⁰⁾ (森川 1990: 62-63)。

私は、「白いスゥルデ」祭祀がオルドスで再開されてからの、サガン・セチェン・ホン・タイジの子孫が率いるウーシン旗のガルハタン・ハラールの祭祀への約300年間にわたる継続的な参加に注目している。現在のところ、このガルハタン部と「白いスゥルデ」祭祀との関わりに関する資料は見つかっていないが、とても偶然の一致とは考えられない。以上の理由により私は、サガン・セチェン・ホン・タイジは、オルドス地域に流転してきた「白いスゥルデ」の存在を知っていたと想像する。リクダン・ハーンに追随していたかれは、当然、チャハル・モンゴル族の事情にも精通していたにちがいない。チャハル・モンゴル族の栄枯盛衰を見てきたサガン・セチェン・ホン・タイジは、大ハーンの「白いスゥルデ」を知らぬはずがない。

「白いスゥルデ」は以上のような特殊な歴史的背景のもとで、オルドスにおちつい

た。そのため、「白いスゥルデ」祭祀と政治との関わりは微妙なものであった。たとえば辰年における「血祭」(4.2参照)は旗王の印璽付きの公文書を得て、ハラーとソムの長官らが協力して開催される。祭祀に使用されるヒツジの丸煮として、毎年旗王の家畜群からヒツジを4頭徴収することになっていた(Erkesečen 1991: 19; 34)。祭祀活動はチャハル、ガルハタンの両ハラー内だけでおこなわれることとし、旗王はこれに参加しないしきたりになっていた。旗王がチンギス・ハーンの八白宮祭祀に積極的に参加するのと比べれば、「白いスゥルデ」への対応は慎重すぎる。これについては、以下のような解釈ができる。それは、祭祀が秘密裏に再開したと伝えられている康熙晩年には、すでに内・外モンゴルのほぼ全体が清朝の支配下に置かれていたが、清朝のモンゴル族に対する警戒は緩和していなかったであろう。おそらく、旗王はこの「白いスゥルデ」祭祀の意義を十分認識したうえで、清朝政府への配慮から祭祀への積極的な介入を避け、祭祀の規模も限定したものと考えられる。大ハーンの「白いスゥルデ」の存在とその祭祀の再開は、清朝の懐疑をかうことになる。

3.3 チャハル部内の父系親族集団とその職掌

「白いスゥルデ」の祭祀に携わる人たちは、総じて旗手(*tuyči*)と呼ばれる。旗手はさらに複数の父系親族集団から構成されている。エルケセチェンは、「白いスゥルデ」の祭祀者は、モンゴルの各集団から集められた人びとで、本来はさまざまな父系親族集団からなっていたが、いまはほとんどがその祭祀職掌名を父系親族集団名にしているという(Erkesečen 1991: 30-31)。私が調査していたころ、かれらの父系親族集団名について訪ねると、まず旗手と答える人が多く、さらに質問を続けると旗手のなかの某父系親族集団であると明かす者が多かった。現在では旗手を父系出自とする意識はかなり定着している。

3.3.1 父系親族集団(*oboy*)

エルケセチェンは、ウーシン旗には、リクダン・ハーンに追随していた10いくつかの父系親族集団が残留したという(Erkesečen 1989: 49-50)。一方、サインジャラガルは具体的に以下の父系親族集団名をあげている。それはホイト(*Köid*)、テレングース(*Tülünggüs*)、ヤンガート(*Yangyayad*)、シニト(*Sined*)、オンニュート(*Ongniyud*)、シャルガ・アジャラガタン(*Siry-a Ajiryatan*)などである(Sayinjiryal 1992: 32)。サインジャラガルは、ほかにもいくつかの父系親族集団名をあげているが、いずれも職掌を表す「チ」か「チン」が語尾としてついていること

から、それらは本来の父系親族集団名ではなく、職掌として存在したと考える方が妥当であろう。各父系親族集団について、エルケセチェンもサインジャラガルもこれ以上詳しいデータを提供していない。以下では、主として私の調査で得た資料をもとに、チャハル部内の各父系親族集団について述べたい。

1) エルクート (Erkegüd) : この集団については、モスタールトの詳しい報告がある (Mostaert 1934: 1-20)。また、近年では同集団出身のボーシャンによる調査がある (Bou Šan 1988)。

モスタールトは、エルクート部の人たちがヨンルンという十字架を祭り、バクシ (*baysi*) という祭祀者が存在し、「洗礼」と思われる儀式をおこなうことから、かれらを元代のネストリウス (景教) 教徒「也里可温」であると主張している (Mostaert 1934: 1-20)。この件に関するモスタールトのインフォーマントは、ウーシン旗トリ地域に住むガルマバンザル1人であった。インタビューは北京でおこなっている。モスタールトによれば、ガルマバンザルはエルクート出身であるという (Mostaert 1934: 3)。私が複数のエルクート部の長老に確認したところ、ガルマバンザルがエルクート部の出身であったという確実な証拠を得ることはできなかった。

モスタールトは、エルクートがネストリウス教徒であったことを証明するため、つぎのことをあげている。それは、エルクート人はチンギス・ハーン祭祀を主宰するダルハトに嫌われていたため、「八白宮」の祭祀用品を徴収して歩くダルハトの姿を見ると逃亡し、なるべく衝突しないようにしていたという。また、一般のモンゴル人からも「黒い骨のエルクート」、「悪いエルクート」と呼ばれていたという (Mostaert 1934: 6)。

ボーシャンの報告によると、現在でこそ文語として *Erkegüd* とつづるが、本来は *Yergün* に複数形 *üid(ud)* をつけてできたものであるという (Bou Šan 1988: 1-2)。*Yergün* あるいは *Yergüd* は、確かに元代のネストリウス (景教) 教徒「也里可温」を表現したつづりであるかもしれないが、*Erkegüd* が *Yergüd* に由来するとの説明は、証拠不十分である。

私は、オルドスのエルクート人がネストリウス教徒であったという説に疑いをもつ。エルケとは、モンゴル語で「特権」や「愛しい」を意味し、エルクートとは「エルケをもつ者」の意であろう。モスタールトも記録しているように、エルケは「特権を有する人」または、「最愛の」との意味で人名にも用いる。エルケということばは、爵号にも使用された。たとえば『蒙古源流』の著者サガン・セチェン・ホン・タイジは、

ジノンから「巻狩の際に中央を進む」ことができる、という意味のエルケ・セチェン・ホン・タイジの爵号を授けられている。この場合のエルケとは「独立自主」の意味である (Mostaert 1956: 22-23)。

エルカート部はリクダン・ハーンについてオルドスに來たという伝承をもち、清朝のころはチャハル・ハラーに所属していた。毎年旗王にヒツジ1頭を納めるだけで、その他の税金は免ぜられていた (Bou Šan 1988: 6)。かれらには旗手たちの主宰する「白いスウルデ」の祭祀に参加する義務があった。

エルカート部の特権エルケは、「也里可温」の歴史的背景に由来するのか、それとも「白いスウルデ」の祭祀者集団の一部として、チンギス・ハーンの祭祀者ダルハトと同じように特権エルケを与えられたのか、さらに研究する必要を感じる²¹⁾。

エルカートは1860年代までは、長城のタール・ホト (鎮靖堡) の北、クヌク・ホト (波羅堡) あたりで放牧していた。同治年間 (1862-1874) の回民反乱の被害を受け、イダム湾へ一時避難した後、ウーシン旗無定河南岸のシャラ・タラへ移って放牧していたという。今世紀初頭、漢族の進出で放牧地が占領されると、無定河を渡って一部はスゥスハイへ、一部はシニ・スゥメ寺、トリへと分散していった。

エルカート人の漢字姓は「王」で、「特権」エルケにちなんで採用したという。

2) シャルガ・アジャラガ (Siry-a Ajiry-a) : サインジャラガルはシャルガ・アジャラガタンとしている (Sayinjiryal 1992: 32)。「タン」は複数を表す接尾辞である。シャルガは「淡黄色のウマ」との意で、アジャラガは「種雄ウマ」である。この集団の一部の人たちは私にシャル・アジャラガ (黄色い種雄ウマ) と表現していた。特定種類の家畜を表す名詞を父系親族集団名とするのは、先祖の従事していた経済活動と関連するとの見方もある (Serji 1993: 52)。「種雄ウマ」の放牧者であったなら、職掌を表す「チン」がつくはずである。モンゴル族はとりわけ淡黄色のウマを珍重し、チンギス・ハーンの八白宮の1つ、手綱の白宮は、チンギス・ハーンが騎乗していたとする8匹の淡黄色のウマの「転生」を祭っている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 274-275)。「八脚の白いスウルデの祭祀」という文書には「九匹の淡黄色の種雄ウマの尻尾で、八脚の白いトックを造って立てる」 (*Yisün siry-a ajiry-an-u segül-iyer, Naiman költü çayan tuy-i, Bayiyulun qadquju*) とある (Rintchen 1959: 72)。接尾辞「チン」がないことを考え併せると、シャルガ・アジャラガという集団の職能は、なんらかの「種雄ウマ」の象徴性をもっていた集団か、垂れ房など「白いスウルデ」の装飾品を調達する集団であった可能性がある。

かれらはかつて、「白いスウルデ」の祭祀において、各種祭詞を唱えるバクシ役を

つとめていた。シャルガ・アジャラガ部の漢字姓は「馬」である。

3) シニト (Sinid あるいは Siničüd) : 私はこの集団出身のセルジンガ老 (1992年当時74才 写真2) にインタビューできた。かれによるとシニトは世襲制の箭筒士ホルチをつとめていたという。

4) テレングース (Tülünggüs) : テレングートともいう。私は、この集団について記述するとき、非常に慎重な態度をとる必要があると思う。サインジャラガルとシャルダイによると、オルドスの各旗に居住するテレングースと称する父系親族集団のもっとも大きな特徴は、その内部におけるドーダーチン (*dayudayčïn*) と称する「雷をよぶ」特別なシャマン集団の存在である (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 455)。「白いスゥルデ」祭祀にもドーダーチンという職掌がある。このドーダーチン職をつとめる人がテレングース部の出身かどうか、私はついに確認できなかった²²⁾。

5) ヤンガート (Yangyayad) : ヤンガートの語義は不明である。ハンフリーによると、ブリヤート・モンゴル族のなかにヤングート (Yangut) というクランがある (Humphrey 1979: 239)。語義は解明されていないが、オルドスのヤンガートと一致するのではないかと推察される。モスタールトは、「白いスゥルデを祭るヤンガート部の人」と書いている (Mostaert 1942: 598) が、それ以上の言及はない。現在はウーシン旗のトリ地域、ムー・ブラク地域に約10数戸が確認されている。かれらは、モンゴル最後の大ハーンであるリクダン・ハーンの属民であったと自称している。

ヤンガート部は、北京から独自の「神」をもった1人がハルハに行き、ヤンガート部の祖先になったという伝承をもつ。ただそれがいつの時代かはまったく分からない



写真2 シニト部のセルジンガ老

という。また、先祖が「白いスゥルデ」の祭祀用品を窃盗した「罪」から、「白いスゥルデ」の祭祀において、代々ジョリク (joliy) の役を担当することになったという。ジョリク (またはジョリダス joliyadasu) とは、「身代わり」や「鬼」、「替罪羊」を意味する (4.3.3参照)。いわゆる「窃盗による罪」で祭祀者にされたというモチーフは、チンギス・ハーンの八白宮祭祀における「黄金のウマつなぎ」役も同じである。八白宮祭祀では、この「黄金のウマつなぎ」役をつとめる人は、足を地中に埋められる。参拝者たちはその足元に金銀類を捧げる (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 143-144; 215-216)。ヤンガートが身代わりジョリクをつとめる際も、参拝者はかれに金銀類や絹などを与える。両者とも「窃盗の罪」を犯して祭祀者にされたというよりも、むしろ「略奪の自由をもつ」特権的な祭祀者であると見た方が適切であろう。ヤンガートは「白いスゥルデ」の専属祭祀者集団の一部であるだけでなく、旗手たちの従者であったとも伝承されている。

ヤンガートは現在、語頭の Yang を表す「楊」という漢字姓を使うようになっている。

現段階で私が直接に確認し、インタビューできた父系親族集団は以上の5つである。ボーシャンは、「白いスゥルデ」の旗手たちはすべてエルクート出自であったろうという (Bou Šan 1988: 26)。ボーシャンのこの推察に賛成できる点と、賛成できない点がある、と私は思う。旗手たちは特権エルケをもっていたという点で賛成し、かれら全員がネストリウス教徒「也里可温」であったかどうかには、疑問が残る。

テレングースという集団名は『モンゴル秘史』に見られる。ヤンガート、シャルガ・アジャラガ、シニトなどの父系親族集団は、「白いスゥルデ」の祭祀活動において重要な役命を担っており、特殊な祭祀職掌と深い関わりをもつ集団である。「白いスゥルデ」祭祀に携わるこれら父系親族集団の性質から、「白いスゥルデ」にはかつて組織的かつ複雑な祭祀体系が存在したことは認められよう。

これらの集団に共通した特徴は、いずれも旗手と自称していることである。旗手とは、一職掌の名称である。チンギス・ハーンの八白宮と軍神「黒いスゥルデ」の祭祀者集団ダルハトのなかにも旗手職掌が設けられている。旗手と称する祭祀者集団は、本来はもっと多くの父系親族集団から構成されていたが、歴史的変遷のなかで、固有の父系親族集団名が忘却されたのであろう。

祭祀者集団のなかで、現在エルクートと称する人びとは一部免税の特権を与えられていた。また、旗手をつとめる人は結婚式の際、一般のオルドス・モンゴル人のように花嫁の実家へ出迎えに赴く (Qasbiligtu 1984: 10-19) ことはせず、親類の者か兄

弟が代わりに行くことになっていた (Erkesečen 1991: 32)。これは、チンギス・ハーンの直系子孫タイジと同類の特権である。「白いスウルデ」祭祀に関わるすべての祭祀者集団が他にどのような制度的な特権を保持していたかは、現在では確認できない。

「白いスウルデ」の祭祀者集団と、チンギス・ハーンの八白宮と軍神「黒いスウルデ」の祭祀を維持するダルハトの父系親族集団とを比較すると、両者のあいだに大きな差異が存在していることがわかる。ダルハトのなかの父系親族集団名は、『モンゴル秘史』などに登場する歴史上の有力な部族名と一致するものが多い (楊 1995b: 29-34)。現在でもダルハトはチンギス・ハーンの親衛部隊ケシクの子孫、英雄功臣らの子孫を名乗る。それを証明する家系譜も所持している (Suyul 1992: 46-71)。ダルハトは、「自由の民」たる「ダルハン」の称号を前面に出して誇示している。一方、「白いスウルデ」祭祀に携わる祭祀者は「旗手」と称するが、かれらにどのような制度的な特権が与えられていたか、現在でははっきりしなくなっている。

3.3.2 祭祀職掌

つぎに、エルケセチェンの報告 (Erkesečen 1991) を参考にして、旗手集団内の諸職掌を見てみよう。

1) 旗手 (tuyči) : スウルデを守る人びとである。かれらは祭祀のときだけでなく、ふだんからスウルデに香を捧げ、スウルデを立ててある祭殿の清掃、祭祀用品をみずから調達する義務をもつ集団である。祭祀の日には、鞭を手にもち、儀礼の進行を監督する (Erkesečen 1991: 31)。

2) シルビチ (silbiči) : シルビとは「白いスウルデ」の竿のことである。シルビチは、祭のときにスウルデの竿をもち、みずからが竿を演じる人びとである。「白いスウルデ」の「血祭」において (4.2参照)、シルビチ9人がスウルデを担ぐ儀礼があり、これによって「白いスウルデ」の「9脚」を形成する (Erkesečen 1991: 32)。ポーシャンは、シルビチは世襲の職掌であったという (Bou Šan 1988: 23)。

3) ハラ・バクシ (qar-a baysi) : 祭詞を朗唱する人のことである。ある旗手は私にバクシは本来世襲の職掌であったが、後に文字の読める人を任命することが多くなったと語った。

4) ホルチ (qorči) : 箭筒士のことで、スウルデを守る武人である。巡回に出かける際、弓矢で武装して護衛にあたる。

5) ウーラガチ (uryači) : ウーラガとは、ウマ捕り竿のことである。「白いスウルデ」の祭祀において、祭祀に使用されるヒツジは手で捕まえることを禁じており、す

べてウマ捕り竿で捕獲する。ウーラガチとは、祭祀用のヒツジをウマ捕り竿で捕まえる人を指す²³⁾。「白いスゥルデ」が巡回に出かけるとき、およびその「血祭」のときに、スゥルデよりも必ずウーラガがさきに出発する。ウーラガが動かない限り、スゥルデは動かないとされる (Erkesečen 1991: 33)。

6) イルガイチン (yaryačın あるいは yariyačın) : 屠殺手との意味で、祭祀用のヒツジを屠殺し、解体する人のことである。

7) シレーチン (siregečín) : シレーとは供卓の意味である。シレーチンは祭祀用のヒツジなどを料理する人である。

8) ガブシグーチン (yabsiyučín) : 「血祭」のときにヒツジの血をスゥルデに振りかける人である。

9) ジョリク (joliy) : ジョリクはまたジョリダス (joliyadasu) とも呼ばれる。この役は世襲制で、もっぱらヤンガート部出身者がつとめる (4.3.3参照)。

以上あげた「白いスゥルデ」の職掌を、チンギス・ハーンの八白宮と軍神「黒いスゥルデ」の祭祀者ダルハトの職掌と比較すると、つぎのような差異がある。

第1, 旗手のなかの祭祀職掌は、チンギス・ハーンの八白宮と軍神「黒いスゥルデ」の祭祀者ダルハトの職掌に比べて比較的構成が単純で、数も少ない。『十善白史』は、八白宮と軍神「黒いスゥルデ」祭祀の理論的根拠とされており、当然それに記録してある祭祀者たちの爵号は、八白宮祭祀を運営するダルハトたちの爵号と一致するところが多い。これに対し、「白いスゥルデ」祭祀に従事する祭祀者集団の諸職掌のうち、『十善白史』に記録のある祭祀職掌と一致するのは、旗手とバクシのみである。

第2, ダルハトはかつて18のケシクに組織されていた (楊 1995b: 32)。ケシクとは歴代大ハーンや諸王たちが組織した特権的、政治的親衛軍団である。ダルハトたちは、ケシクに基づいて組織されているため、かれらの特権性と政治性がみごとに反映されている。

第3, ダルハトたちは、チンギス・ハーンの八白宮祭祀において、チンギス・ハーンから授与される「黄金の恩賜」(altan tögegel) を受領することを演出し、チンギス・ハーンとの強烈な連帯意識を誇示する (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 103-104; 419-420; 楊 1995b: 29-31)。ある祭祀者集団がダルハトかどうかを識別するにあたって、大ハーンから恩賜ヤムをもらっているかどうか判断材料の1つになった (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 455)。エルケセチェンは、自分たち旗手も大ハーンから恩賜ヤムを与えられる立場にあったと主張している (Erkesečen 1991: 30-31) が、

「白いスゥルデ」祭祀において、恩賜ヤムを授与する儀礼は、現在おこなわれていない。

4 「白いスゥルデ」の祭祀

「白いスゥルデ」祭祀は約30年間中断されていたため、祭祀の実態を完全に復元することは難しい。近年相次いで公開された調査報告にも、異なる記述が目立つ。本章では、供物ジュマとそれをあつかう祭祀職掌ジョリクに注目する。また、新しく見つかった祭祀テキストを呈示することによって、祭祀の二重構造の実態究明を試みる。

4.1 祭祀の期日と名称

エルケセチェンとサインジャラガルのあいだでは、「白いスゥルデ」の祭祀期日と名称に関する記述に差異が見られる。

エルケセチェンの1989年の論文によると、「白いスゥルデ」には年に5回の「大祭」があるという。それは、正月3日の「乾いた食品と茶の祭」(*qayurai soy-un čai-yin tayily-a*)、オルドス暦²⁴⁾の8月(陰暦5月)3日の「夏の湖の盛宴大祭」(*jun-un nayur-un yeke nayir-un tayily-a*)、オルドス暦の9月(陰暦6月)3日の「雄の仔ヒツジの大祭」(*uyuray-un yeke tayily-a*)、オルドス暦10月(陰暦7月)3日の「ヒツジの丸煮による秋季大祭」(*namur-un ödge sigüsün-ü yeke tayily-a*)、オルドス暦のホビ月(陰暦10月)3日の「収穫祭」(*sirege quriyalya-yin tayily-a*)の5つである。そのうち、もっとも重要な「夏の湖の盛宴大祭」には、チャハル・ハラールに加えて、ガルハタン・ハラールが積極的に関わることになっていた(Erkesečen 1989: 47)。

エルケセチェンは1991年の報告で、さらに詳しい情報を提供している。それによると、毎年の祭祀はまず正月の「新年詣で」(*sine bariqu*)からはじまる。旗手たちは、正月1日の早朝、「五畜の足跡が眼に映るようになる」ころ、「白いスゥルデ」のもとに集まり、新年を迎えるために用意した各種食料を供物として捧げ、「儀礼用の絹ニンドルの祈禱」(*nindar-un dayadqal*)、「灯明の祈禱」(*jula-yin dayadqal*)、「振りまきの祈禱」(*sačul-un dayadqal*)、「祭祀の祝詞」(*takily-a-yin irügel*)、「白いスゥルデの献香」(*čayan sülde-yin sang*)などが唱えられる。「夏の湖の盛宴大祭」は、「夏営地の大祭」(*jusalang-un yeke tayily-a*)または「乳製品祭」(*sayalin tayily-a*)とも呼ばれる。「雄の仔ヒツジの大祭」はまた「仔ヒツジ祭」(*qurayan tayily-a*)ともいう。ホビ月の「収穫祭」は、「冬の皮綱大祭」(*ebül-ün tasaman yeke tayily-a*)または「冬

営地の大祭」(*ebüljiyen-ü yeke tayily-a*)ともいう (Erkesečen 1991: 14-15)。

ところが、サインジャラガルは、上述のエルケセチェンの報告を引用しながら、かなり異なる見解を示している。モンゴル帝国の「白いスゥルデ」の祭祀には、「日祭」(*edür-ün takily-a*)、「月祭」(*sara-yin takily-a*)、「小祭」(*bay-a takily-a*)、「大祭」(*yeke takily-a*)の数種類があるという。そのうち、「日祭」とは、旗手たちが毎朝早朝におこなう清掃、献香などの儀礼であるとする。この際、「スゥルデの献香」(*sülde-yin sang*)を唱える。「月祭」とは、毎月2日、16日に灯明と香を献上し、宝螺と銅鑼を演奏する祭である。「小祭」には、正月1日の「乾いた食品祭」、正月3日の祭祀、5月3日の「夏営地祭」、6月3日のチャハル・ハラール第2ソムによる祭祀、7月3日のチャハル・ハラール第3ソムによる祭祀、10月のチャハル・ハラールのジュルジャガ・ソムによる「冬の祭祀」などがある。大祭とは、辰年の「血祭」(*doysiyul-qu*)を指し、また「垂れ房に櫛けずる祭」(*kögül sügükü takily-a*)ともいう (Sayinjiryal 1992: 33-36)。サインジャラガルの記述から、チャハル・ハラールの各ソムは、それぞれ異なった祭祀を分担していたことがわかる。

エルケセチェンとサインジャラガル両氏の記述は、それぞれ祭祀の一部を断片的にとりあげているようなところがある。個々の祭祀名に関して記述が異なるのは、各々のインフォーマントからの情報によるのであろう。

4.2 「白いスゥルデ」の「血祭」

「白いスゥルデ」は、12年に1度の辰年ごとに、「モンゴル族の威勢を強め、敵の勢いを圧する目的」で「血祭」をおこなう。エルケセチェンによると、まず、旗王の許可を得てから吉日を選び、「白いスゥルデ」にヒツジの丸煮1つを献上、紙に描いた長髯の人物像を的にして、箭筒士がそれを矢で射抜く (Erkesečen 1991: 19)。ある旗手の話では、かつて箭筒士は生きた人間を標的にしていたという。この後シルビチ職が小スゥルデを手白い種雄ウマに乗り、ウーラガチン職、旗手らに守られながら南東に向かって出発し、太陽の運行方向にしたがって、チャハルとガルハタン両ハラールの各家をまわる。各家は1頭か3頭、あるいは9頭のヒツジを献上する。ヒツジを献上する際は、かならず白いフェルトを同時に捧げることになっていた。それが「9の9」すなわち81頭に達し、房の取り換えに使用する白い種雄ウマのたてがみなどがそろると、「白いスゥルデ」はそれまで祭られていたムー・ブラクの地にもどる。

「血祭」は、陰暦10月3日の辰刻に始まる。軍神「黒いスゥルデ」の場合と異なり、女性たちも遠方から参拝することが許される。モンゴル族以外の者は排除される。シ

ルビチ職らは、「白いスゥルデ」を肩に乗せて片足跳びしながら外垣を時計回りに（太陽の運行方向と同じ）3回まわる²⁵。この際、供卓のうえには酒を混ぜたヒツジの血が供えられる。旗手の1人が鞭を手にしてこの血を守る。エルケセチェンは、これは人びとがそれを奪って啜るのを防ぐためであるという（Erkesečen 1989: 48）。この血は、「白いスゥルデ」をふたたびもとのところに立てた後に3人の旗手が飲むことになっている（Erkesečen 1989: 49; 1991: 25）。ある旗手によると、「血祭」において、参加者はすべてこの血を啜ることを願っているという。血を奪って啜り飲むことに、「血祭」に参加した意義を見いだしているのであろう。

「白いスゥルデ」が外垣を1回まわるごとに、ガブシグーチン職が切りとったヒツジの頭に血をつけ、スゥルデに向かって3回振りかける。ついで、バクシ職が大声で以下のことばを朗唱する（Erkesečen 1991: 23-24）。

Ene edür-ün ene çay-tu
 この日、このとき
yadayatu dalai-yin derdeke
 大海の彼方に
yarqu naran-u tere jüg-tü
 出る太陽の方向に
eriyen silbi-tü
 まだら足で
ergigül ulayan uruyul-tu
 むき出した赤い唇をした
ergigüü engger-tü
 左前に服を着た
ebesün malaya-tu
 麦わら帽子をかぶった
pirang çayan šaqayi-tu
 ばかでっかい白い靴をはいた
bayarang²⁶ -un toloyai oroyu
 くそったれの頭のうえに
silege orkiysad-i orkiba
 残灰を捨ててくるように

.....

「白いスウルデ」が外垣をまわるとき、旗手たちは「北ハンガイ、アルタン・テベシェ地方へ帰るよ」と繰り返し叫ぶ。シルビチ職が参拝者全員を率いてひざまずき、「輝かしい聖なる白いスウルデよ、引きつづきわれらと一緒にこの地にとどまるように」と祈願する。ここで旗手たちが口にする北ハンガイは、モンゴル高原でもっとも優れた放牧地帯で、モンゴル族発祥の地の1つと伝承されている。吉田の説では、ハンガイということばは、モンゴルの代表的な地理地帯を表す重要な用語であるという(吉田 1980: 238-241)。旗手たちの説明では、リクダン・ハーンが逝去し、旗手たちが厳しい政治環境におかれていた歴史がある。直接リクダン・ハーンの名を口にすることができなくなったため、ハンガイという地名をもって大ハーン名に替えた。これは、「大ハーンのもとへの復帰」を暗示するものであるという。

私は、「北ハンガイへ帰る」という儀礼は、「白いスウルデ」祭祀の一連の儀礼のなかで、おそらくもっとも古い要素の1つであると見ている。北アジア・中央アジアの歴史上、モンゴル高原のもっとも豊かなハンガイ地帯を制する者はモンゴル高原を制覇することができた。モンゴル帝国の首都カラ・コルムもこのハンガイ地帯にあった。「北ハンガイ」への儀礼的な回帰は、大ハーンに追隨する「白いスウルデ」の「都への凱旋」を意味するものであろう。一方、アルタン・テベシェ²⁷⁾は、アラジャン地域に近いアラク(賀蘭)山の一支脈で、オルドス・モンゴル部がいまのオルドス地域(黄河の湾曲地帯)に定着する以前の放牧地であった(Mostaert 1956: 2-3)。アルタン・テベシェを口にするようになったのは、オルドス部からの影響であろう。

サインジャラガルは、「白いスウルデ」はオルドス地域で祭られて数百年間たったため、ダルハトたちの主宰するチンギス・ハーンの軍神「黒いスウルデ」祭祀の影響が濃厚であると指摘している(Sayinjiryal 1992: 33-35)。確かに両者の「血祭」において、スウルデに向かって血を振りかける儀礼や唱えられる祭詞はほとんど同じであり、祭祀の目的と運営にも共通した要素が見られる。それは「黒いスウルデ」からの影響というよりも、スウルデあるいはトゥクの祭祀に共通して存在した儀礼であろう。「血祭」は、1940年(庚辰)におこなわれたきりである。旗手たちが1988年(戊辰)に「血祭」を再開しようとしたが、政治的理由で実現できなかったという。

4.3 供物ジュマをあつかう職掌

「血祭」において、バクシ職が祭詞を唱え、3人の旗手が血を飲んだ後、「ジョリ

クを出す」儀礼が始まる。この際箭筒士は、30歩先につないであった白いヒツジを弓で射殺し、屠殺手イルガイチンが2個の腎臓を摘出してヤンガート部出身者の両手に握らせる。ヤンガート部出身の者は、ヒツジの胴体を抱えて南東方向へ出発する。その際、箭筒士たちはあとを追うふりをする。この儀礼を「生きたジョリクを出す」(*amid jolij-i yaryaqu*)という。儀礼におけるヒツジをジュマ (*jum-a*) またはジュルマ (*julma*)、ジュルム (*julmu*) といい、腎臓を握りもって出発するヤンガート部の出身者をジョリクという。以下では、供物ジュマと特殊な職掌ジョリクについて検討する。

4.3.1 文献に見る「ジュマ宴」

元朝時代の資料に、ジュマは「詐馬」の形で表れる。箭内は論文「蒙古の詐馬宴と只孫宴」のなかでジュマ(詐馬)をとりあげている(箭内 1930: 945-956)。それは元代の詩人周伯琦の詩「詐馬行」と楊允孚の詩「灤京雜詠」のなかの記録を考察したものである。周伯琦はその詩序のなかで「……(前略)名此曰只孫宴。只孫華言一色服也,俗呼曰詐馬筵」と記している(楊家駱 1967)。ここで周伯琦は「只孫」を漢語(華言)の「一色服」すなわち「同じ色の服装」であるとしている。また、元朝のころ、「只孫宴」を俗に「詐馬筵」と呼んでいたことがわかる。「只孫」はまた「質孫」とも表記され、『元史』には「質孫,漢言一色服也,内筵大宴則服之」とある(宋 1992(76):1938)。箭内は、「只孫は質孫とも書く、蒙古語 Jisun の音譯で、その義は色である。宴會列席者が同一色の服を用うる所から、その服を只孫衣といひ、その宴を只孫宴といったのである」と解釈している(箭内 1930: 947-948)。

箭内はさらにマルコ・ポーロの所伝を用いて論証したあと、「要するに、凡そ宮中の大宴で、それに参列する大官が同一色の禮服、即ち所謂只孫衣を着用する場合には、それが新年宴會でも聖誕節祝宴でも、又は新帝即位の大宴でも、均しく只孫宴と稱せられたもの、少なくとも稱せられた筈である」と結論している(箭内 1930: 951)。

箭内は、「只孫宴」を俗に「詐馬筵」と呼んでいたことに懐疑的な態度を示し、これを周伯琦の誤解であるとしている(箭内 1930: 947)。箭内は、清朝の乾隆皇帝の御詩など清朝時代の資料でジュマ(詐馬)を説明しようとする。乾隆皇帝は元代詩人のいう「詐馬」は「競馬」の意味であると独断している。箭内もこれに迎合し「帝の言ふ所が正しいであらう。……(中略)詐馬は幼童の競馬に外ならぬ……(以下略)」という(箭内 1930: 952-953)。しかし、箭内の依拠する乾隆皇帝の御詩自身に大きな問題がある。偶然にもジュマを漢字で「詐馬」と表記しただけで、ジュマの「マ」

は「馬」とは無関係である。

箭内の「只孫」に対する研究は評価すべきである。「只孫」とは元朝の皇帝から下賜された服装のことで、着用者の政治的地位を示すものであろう。箭内の指摘どおり、「只孫宴」を親衛ケシクタンが皇室より受けた寵遇の一例（箭内 1930: 950）と理解できよう。一方、「詐馬」は宴会筵席において出される主要な「食べ物」で、「只孫服」と同じく皇帝より受ける「寵遇」である。「只孫宴」は服装からの名称で、「詐馬筵」は食べ物からの名前である。

箭内の誤解には韓儒林も言及している。韓儒林は、箭内は「詐馬」の「馬」という漢字と乾隆皇帝の詩に惑わされたと指摘し（韓 1982: 249）、「詐馬」はペルシア語の「衣服」を意味する *jā mah* に由来するとし、これによって「只孫」も「詐馬」も同一の意味で、両者とも衣服を指すものであると結論している（韓 1982: 252）。

箭内の誤解と韓儒林の強引な説は、近年否定されている。ナクイサインクはジュマを「競馬」とする箭内説、衣服とする韓儒林説を否定したうえ（Nayuyisayinküü 1988: 132-137）、元代皇帝の飲食を記録した『飲膳正要』にある「柳蒸羊」もジュマの一種であるとする（Nayuyisayinküü 1988: 138）。ナクイサインクは『十善白史』と「聖なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる 2 オヒツジの赤裸のジュマ」（*Boyda noyad-un qorim-un qamuy beleg-i бүтүгөңи төлүгө қонин-у ницүгүн жум-а*）と題する文書資料（Altanorgil 1986: 25-29）を主な根拠に、『十善白史』にある「四季大宴」（*dörben çay-un qorim*）はすなわち「国家大事」としての「詐馬宴」（*jum-a qorim*）であったと主張している（Nayuyisayinküü 1988: 141）。

以上の諸説から、ジュマ（詐馬）は、元代皇帝の献立にものぼり、列席者が皇帝から下賜された同一色の服をまとして出席する「只孫宴」にも筵席を飾った「尊い食べ物」であったと推定できよう。「只孫服」もジュマも元朝皇帝からの特別な恩賜であったと理解しても差し支えないであろう。

私は、チンギス・ハーンの八白宮の祭祀者ダルハトからの情報と、サインジャラガルとジャラルダイの『黄金オールドの祭祀』とを資料に、チンギス・ハーン祭祀の政治構造について論じたとき、チンギス・ハーン祭祀は『十善白史』にある「四季大宴」を理論的背景にしていると主張した（楊 1995b: 27-54）。また、チンギス・ハーン祭祀と密接な関係にある末子トロイ・エジン祭祀もやはり『十善白史』を理論的根拠にしていると指摘した（楊 1997: 654-655）。チンギス・ハーン祭祀には、ジュマを供物として使用していた（Narasun 1989: 438-439）。ジュマの具体的な使用方法について、『黄金オールドの祭祀』は詳しい資料を呈示していない。この点に関しては、アル

タンオルギルも気づいている (Altanorgil 1986: 26)。『黄金オールドの祭祀』が引用している「金書」(Altan Bičig) という祭祀の指針書には、ジュマに関する内容がある。それには、モンゴルの大ハーンやジノンをはじめ、6大万戸集団が夏の「湖の大祭」に義務として捧げる供物の量が定められている。そのうち大ハーンの納めるジュマは1500であった (Sayinžiryal & Šaraldai 1983: 119; 楊 1998: 99, 206)。そこで、もしジュマに重心をおくとすれば、チンギス・ハーン祭祀における「四季大宴」は、ナクイサイソクの指摘どおり、「ジュマ宴」であったといえよう。

つぎに、ジュマの実態を民族誌のなかから見いだすことにしよう。

4.3.2 民族誌から見た供物ジュマ

近年内モンゴルで出版された民族誌に、ジュマに関する記録を散見する。ナラソンのによると、オールドス地域では、ヒツジを屠殺し、毛をむしりとり、内臓類を取りだして丸ごと煮たものをジュマと呼ぶ。ジュマをチンギス・ハーン祭祀をはじめ、聖地とされるオヴォの祭やシャマニズムの偶像オンゴンの祭、寺院の祭に使用した。また、オールドス各旗の旗王たちが結婚式などにもジュマを用いるが、旗王以外のタイジと庶民はジュマの使用を禁止されていた (Narasun 1989: 438-439)。つまり、ジュマは上層貴族階級の「尊い食べ物」で、一般庶民とは無縁であった²⁹⁾。

一方、ワンジャルはその著書『青い灯明』(Köke Jula) のなかで、ときおりケシクタンの事例をあげながら、調理方法を中心につぎのように記述している (Vangjil 1991: 374)。

ヒツジの腹を割って屠殺したあと、(熱湯をかけて)毛をむしりとり、(垢を)けずりとり。内臓類を取りだし、胴体 (öbci) をそれ以上壊さずにきれいにする。胸と腹の内部に塩や香辛料を適量塗りつける。横隔膜 (örüce) を縫いあわせる。鍋もしくは灌木沙柳や石で特別に設けた蒸し器で丸ごと蒸し焼きにする。蒸しあがったら、角やひずめの角質、踵などを切りとらずに、ヒツジの立っている姿か寝姿の形で大皿に盛る。ヒツジの頭部に吉祥マーク (bayar mangnai) をつけ、それを主賓の方向へ向ける。

ウジュムチン地域では、ジュマをジュルム (julum), 「ジュマ食」(jum-a idege) ともいい、ヒツジを屠殺し、熱湯をかけて毛をむしりとり、内臓類を取りだしたあとは焼かずに丸ごと煮るという (Fülungy-a & Amurmendü 1993: 46-47)。ジュマは、聖地オヴォの祭やシャマニズムの偶像オンゴンの祭、寺院の祭に捧げる「儀礼用の食

食べ物」(*yosun-u qoyula*)と位置づけられている (Fülungy-a & Amurmendü 1993: 47)。

ウラト地域では、ジュマは肉類のなかでもっとも「尊い食べ物」と位置づけられる。ジュマは、聖地オヴォの祭、偶像オンゴンの祭、寺院の祭などに使用され、毎年旗政府において「王印の集会」(*tamay-a-yin čuylayan*)が開かれる際に旗王にも捧げられていた。調理法としては焼かずに煮ていたという (Narasu & Almas 1994: 275)。

清朝時代、内モンゴルの貴族たちが清朝皇帝に謁見する際や朝廷への貢物にもジュマを使用し (Narasun 1989: 438-439; Fülungy-a & Amurmendü 1993: 47)、これを「湯羊」と呼んでいた (Farquhar 1970: 126)。

ワンジャルは、モンゴル族は歴史的に各種大祭にジュマを使用し、ジュマは雄ヒツジの丸煮 (*sigüsü*) の一変種であるという (Vangjil 1991: 374)。ワンジャルを除いて、各民族誌ではいずれもジュマは丸煮シュースよりも格が上であること、換言すればシュースは「ジュマに次ぐ尊い食べ物」とであると記している (Narasun 1989: 439; Fülungy-a & Amurmendü 1993: 47; Narasu & Almas 1994: 275)。

以上諸民族誌はいずれもジュマは「尊い、神聖な食べ物」であることを強調している。チンギス・ハーンの八白宮祭祀をはじめ、軍神「黒いスゥルデ」祭祀や末子トロイ・エジン祭祀など、数多くの祭祀を維持してきたオルドス地域では、ジュマを「上層貴族階級」の特権として認識している。オルドス以外の地域では庶民の利用も容認されているが、肉類のなかで最上級を占めるという神聖性は失われていない。

そこで、上層貴族階級におけるジュマの利用に関する儀礼をうかがわせる作法を、上記のナクイサイクも注目した「聖なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる 2 オヒツジの赤裸のジュマ」と題するテキストから見てみよう。このテキストは、歴史研究者アルタンオルギル (金峰) みずからが保存していた文書を1986年に『内蒙古大学学報』(蒙文版) 誌上に公開したものである。アルタンオルギルはオリジナル文書をどこから入手したかなど、書誌学的情報を提供していない。アルタンオルギルは、テキストの内容をつぎのように分けている。それは、1) 冒頭のチンギス・ハーン賛歌、2) 「至上の賜物の創造者、宴の儀礼作法の規定者と 2 オヒツジのジュマに関するもの」、3) ジュマを献上された後の 9 つの儀礼とその順序、4) モンゴルの政治儀礼とハーンや貴族を讃えた内容、以上 4 つである (Altanorgil 1986: 27-28)。以下には、モンゴルのハーンや貴族たちが宴会で使用していたと思われるテキストをあげる。

Boyda noyad-un qorim-un qamuy beleg-i бүтүгегчи төлүгө qonin-u ničügün jum-a
聖なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる 2 オヒツジの赤裸のジュマ

- 1: *ariyun tengri-yin orun-a orusin bögetel-e.*
 清らかな天界にすみついたころ
- 2: *amitan bökün-iyen jiloyudan tobčilaqu-yin tula.*
 一切衆生を指導し統合するため
- 3: *aldarsiyasan čambudib-dur manduǰu.*
 著名な贍部洲に昇り
- 4: *arban жүг-түр жауын čola mingyan aldar-ıyan түгеген keyigsen:*
 十方に百の称号と千の英名を広めて誕生した
- 5: *boyda ejen Činggis qayan-u jokıyan talbiysan qayan noyad-un qorim-un*
 聖主チンギス・ハーンの創造しておいたハーン・ノヤンたちの宴の
- 6: *qamuy beleg-i bütügegči tölöge qonin-u ničügün jum-a-yi tegüs bökün- iyer*
 至上の賜物の創造者たる 2 オヒツジの赤裸のジュマを完全な形で
- 7: *abču iregsen-ü tulada:*
 運んできたことから
- 8: *angqan-u (yosu).tölöge(-yin) manglai-yi esgeǰü ergükü-yin*
 最初の（儀礼は）：2 オヒツジの額を切って捧げる
- 9: *düri-yi üjegül: boyda noyad-un qorim-un qamuy beleg-i bütügegči tölöge*
 作法を見せよう。聖なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる 2 オ
- 10: *qonin-u ničügün jum-a-yin:*
 ヒツジの赤裸のジュマの
- 11: *qoyaduyar yosu.uridu qoyar boytu-yi esgeǰü sögüdkü-düri-yi üjegül:*
 2 番目の儀礼：前肢の 2 本の橈骨を切ってひざまずく作法を見せよう。
- 12: *ejen noyad-un qorim-un qamuy beleg-i bütügegči tölöge qonin-u ničügen jum-a-yin:*
 主君なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる 2 オヒツジの赤裸のジュマの
- 13: *yurbaduyar yosu.terigün-ü qoyidu sili-yi esgeǰü mörgügülkü-yin düri-*
 3 番目の儀礼：（ヒツジの）頭の後ろの部分を切って拝ませる作法
- 14: *yi üjegül: degedü noyad-un qorim-un qamuy beleg-i bütügegči tölöge*
 を見せよう。上なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる 2 オ
- 15: *qonin-u ničügün jum-a-yin:*
 ヒツジの赤裸のジュマの
- 16: *dörbedüger yosu.qoyidu qoyar borbi-yi esgeǰü kebtægülkü-yin düri-yi*
 4 番目の儀礼：後肢の 2 つの踵を切って（丸煮を生きたヒツジのように）寝かす作
 法を
- 17: *üjegül: qobitu noyad-un qorim-un qamuy beleg-i bütügegči tölöge qonin-*
 見せよう。天命あるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる 2 オヒツジ

18: *u ničügün jum-a-yin:*

の赤裸のジュマの

19: *tabuduyar yosu.takin degegsi ergüjü joysuyaqu-yin düri-yi üjegül:*

5番目の儀礼：ふたたび上方へ捧げ、(丸煮を生きたヒツジのように)立たせる作法を見せよう。

20: *amuyulangtu noyad-un qorim-un qamuy beleg-i bütügegçi tölöge qonin-u*

安寧なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる2オヒツジの

21: *ničügün jum-a-yin:*

赤裸のジュマの

22: *jiryuduyar yosu.takin sögüdju yosulaqu-yin düri-yi üjegül: tegüs*

6番目の儀礼：ふたたびひざまずいて拜む作法を見せよう。円満

23: *jiryalangtu noyad-un qorim-un qamuy beleg-i bütügegçi tölöge qonin-u ničügün*

幸福なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる2オヒツジの赤裸の

24: *jum-a-yin:*

ジュマの

25: *doloduyar yosu.jegün söbege niruyu.segül.böküli bey-e-yin degeji-*

7番目の儀礼：左側の腰部，尾部（など丸煮の）各部位から（少しずつ）供物（としての肉）

26: *yi abču yisü saču: boyda noyad-un qorim-un qamuy beleg-i bütügegçi*

を切りとり，9回振りまこう。聖なるノヤンたちの宴の至上の賜物の創造者たる

27: *tölöge qonin-u ničügün jum-a-yin:*

2オヒツジの赤裸のジュマの

28: *naimaduyar yosu.tögürig yeke töngeli³⁰⁾ yučin dörben üy-e.qorin*

8番目の儀礼：丸く大きな恩賜（として）34の節，24

29: *dörben niruyu.qorin naiman möče.arban jiryuyan yamu-yin terigüten-i*

の腰椎，28の骨つき肉，16のヤムなどを

30: *deg(e)jilen abču yisü yisü saču: qayan noyad-un qorim-un qamuy beleg-i*

恭しく切りとって9回振りまこう。ハーン・ノヤンたちの至上の賜物の

31: *bütügegçi tölöge qonin-u ničügün jum-a-yin:*

創造者たる2オヒツジの赤裸のジュマの

32: *yisüdüger yosu: erkim biligtü sayin üges-iyer irügeju bajayaqu-yin*

9番目の儀礼：尊く縁起の良いことばで祈りはじめる

33: *düri-yi üjegül:*

作法を見せよう。

34: *tölöge qonin-u ničügün jum-a-yi.*

2オヒツジの赤裸のジュマを

35: *töb yeke törü-yin ejid ekileged.*

中央の大きな政治の主君たちをはじめ

36: *törül bögüde-yin dumda sögüddün esgegsen-iyer.*

親族一同の真ん中でひざまずいて切り分けたとおりに

37: *törül bögüde engke jiryan atuyai*

一族全員平安で幸せであるように

アルタンオルギルは、テキストの後半にある貴族、ハーンを讃える内容のなかに、清朝時代のペーラ、ペースなどの爵号がまったく表れないことを根拠として、清朝以前に書かれたものであろうと推定している (Altanorgil 1986: 28)。

以上のジュマに関するテキストの内容を要約すれば、以下のことが明らかである。

1. ジュマは、聖なるノヤンたちの宴会を飾る「至上の賜物の創造者」(*qamuy beleg-i бүтүгөчү*)として定義されている。
2. ジュマの食用にあたって、9のプロセスからなる複雑な儀礼が伴っていた。
3. ジュマを使用する目的には、「中央の大きな政治の主君たち」とその「親族一同」の平安を祈願する点に集中している。ジュマは極めて政治色の強い「尊い食べ物³¹⁾」であるということがわかる。

4.3.3 ジョリクという職掌

ジョリクについて、サインジャラガルは、シャマニズム研究の重要な手がかりであると強調している (Sayinjiryal 1992: 35–36)。ジョリクをまたジョリヤ (*jolij-a*)ともいう。『二十八卷本辞典』(Qorin Naimatu Tayilburi Toli)では、ジョリヤとは、罪に対する償いとして支払う家畜などを指す、としている (Namjilm-a 1994: 1936–1937)。オルドスでは、離婚の際に相手に一定数の大型家畜を手渡すことがあり、これも「ジョリクの家畜」(*jolij bodo*)と呼ばれ (モスタールト 1986: 89)、やはり償いの意味である。

ジョリクという言葉は『モンゴル秘史』第272節に見られる。オゴタイ・ハーンが金朝征服に赴いて龍虎台に駐営し、征服した人びとの祭っていた土地神と河神に崇られて病気になった。この際、身辺のシャマンが、親族一同に「身代わりのジョリヤ(ジョリク)」を出すように勧めた、という項である (Eldengtei & Ardajab 1986: 898)。このジョリヤについて、村上は、ジョリヤは本来モンゴル語やマンシュウ語で「賠償

金、賠償物」の意であるとしたうえ、その語源をトルコ語の *jolij* あるいは *yuluq* に求められることを示唆し、モスタールトの「(ジョリクとは) 病人などが命乞いのため、病の衣をつけて捨て去る人型の身代わり人形で、ラマ僧がつくるもの」(Mostaert 1941: 209) との解釈にも賛同している(村上 1976: 321-322)。『モンゴル秘史』とモスタールトの説明にあるジョリクとは、命乞いのために命じられた身代わりであることがわかる。

命乞いに身代わりジョリクを出す風習は、近代までの内モンゴルのスニト・モンゴル族のあいだにもあった。『スニト風俗誌』によると、命乞いのジョリクはラマ僧がつくった草か小麦粉の人形あるいはヤギで、病人に一番良い服装を着せて、紙に病人の似顔を書いて燃やす。これを「命のジョリクを出す」(*amin jolij yaryaqu*) という。スニトではかつて王公貴族たちは、命乞いに生きた人間をジョリクに使った (*amin jolij-tu amidu kümün-i yaryaday*) こともあるという(Čayan 1992: 328-329)。生きた人間をどのようにジョリクとして使用したかは不明である。

リンチンの編集したシャマニズム関係のテキストのなかにはジョリクとボー(*böge*)を並列する内容が見られる(Rintchen 1975: 4)。ボーとはモンゴル語でシャマンを指すことばである。ジョリクとボーが並列していることから、ジョリクもシャマンのような役割を果たす者であったと考えることもできよう。私が調査で得た資料では、現代のオールドスでは、ジョリクは主として「不吉なもの」、「汚れ」との意味で使われている。病人が命乞いのために密かに捨てる衣服や人形もジョリクと呼ばれる。おそらくジョリクは、シャマンのなかでも、特別な役割を果たす存在であったろう。

以上の諸説を踏まえて、「白いスゥルデ」の「血祭」の際のジョリクについて再考をこころみよう。まず、エルケセチェンの報告はつぎのとおりである。「白いスゥルデ」の「血祭」の際、ジュマとされるヒツジは箭筒士によって射殺される。イルガイチン職がそれを解体し、内臓を取り出して、2個の腎臓をジョリク役の両手に握らせる。皮を剥き、内臓を取り出されたヒツジのジュマをジョリク役に抱えさせて、南東方向へ追いだすのである。この際、箭筒士は「グク! ショク! (*gög šoy*)」といいながらあとを追う(Erkesečen 1991: 24)。サインジャラガルも、ほぼ同じ情報を提供しつつ、ヒツジのジュマの2本の前足をジョリク役の肩に縛りつけるという(Sayinjiryal 1992: 35-36)。

こうした「白いスゥルデ」祭祀におけるジョリクは、命乞いのための身代わり役でも、償いものとしての意味もないのであろう。「白いスゥルデ」祭祀におけるジョリ

クはやはり供物ジュマと併せて考えなければならない。ジュマもジョリクも特別にあつかわれ、特殊な意味をもたせているにちがいない。「白いスゥルデ」祭祀において、ジョリク役がジュマを抱えて送り出されることを「生きたジョリクを出す」(*amidu jolij-i yaryaqu*) という。一方、命乞いの際のジョリクの使用については、「命のジョリクを出す」(*amin jolij yaryaqu*) という。「生きたジョリク」と「命のジョリク」は、一見対照的な存在のように見える。元朝時代から近代まで、「命乞い」のためにジョリクを使用したということは、すなわち、ジョリクは「命乞い」のための生贄であったといえよう。少なくとも、ジョリクは生贄を演じる役であることはほぼ間違いない。

民族誌と古いテキストから、ジュマは最高の供物であることは既に判明した(4.3.1と4.3.2参照)。ジョリクは、生贄としての性格が強いため、ジョリクもジュマも両者とも「白いスゥルデ」に捧げられた最高級の献上品であることがわかる。「白いスゥルデ」は、生贄の人間ジョリクと、ヒツジのジュマとの両方を享受していたといえよう。生贄と最上級の供物を享受している点で「白いスゥルデ」の最高の神聖性が強調され集約されている。

4.4 テキストに見る「白いスゥルデ」祭祀

「白いスゥルデ」祭祀において、「献香」(*sang*)、「祭史」(*öçig*)、「祈禱」(*dayad-qal*)、「祝詞」(*irügel*)などが唱えられる。これらはいずれも古くからテキスト化されている。諸種の儀礼と数多くのテキストはそれぞれ結びついており、そのほとんどは、バクシ職が唱えるのである。テキストは祭祀者旗手以外に絶対公表しないことになっていた。

4.4.1 テキストの入手経緯

1997年1月、私はオルドス地域ウーシン旗出身の詩人、民俗学者ウイグルチン・ハスビリクトより「白いスゥルデ」に関するテキストを入手することができた。テキストは、中国製の長方形の白い紙を幅 8.4 cm 長さ 28 cm に2つ折りし、鉛で縦のラインを引き、毛筆で書いたもので、計10葉である。文中ところどころに赤色の点と縦線が見られる。赤点は句読点のところに、縦線は段落の冒頭と最後の箇所にある(写真3)。これは、おそらく祭祀者旗手がテキストを記憶しようとしたときに付けたものであろう。

ハスビリクトは、このテキストを同じくウーシン旗出身のウイグルチン・チャガン

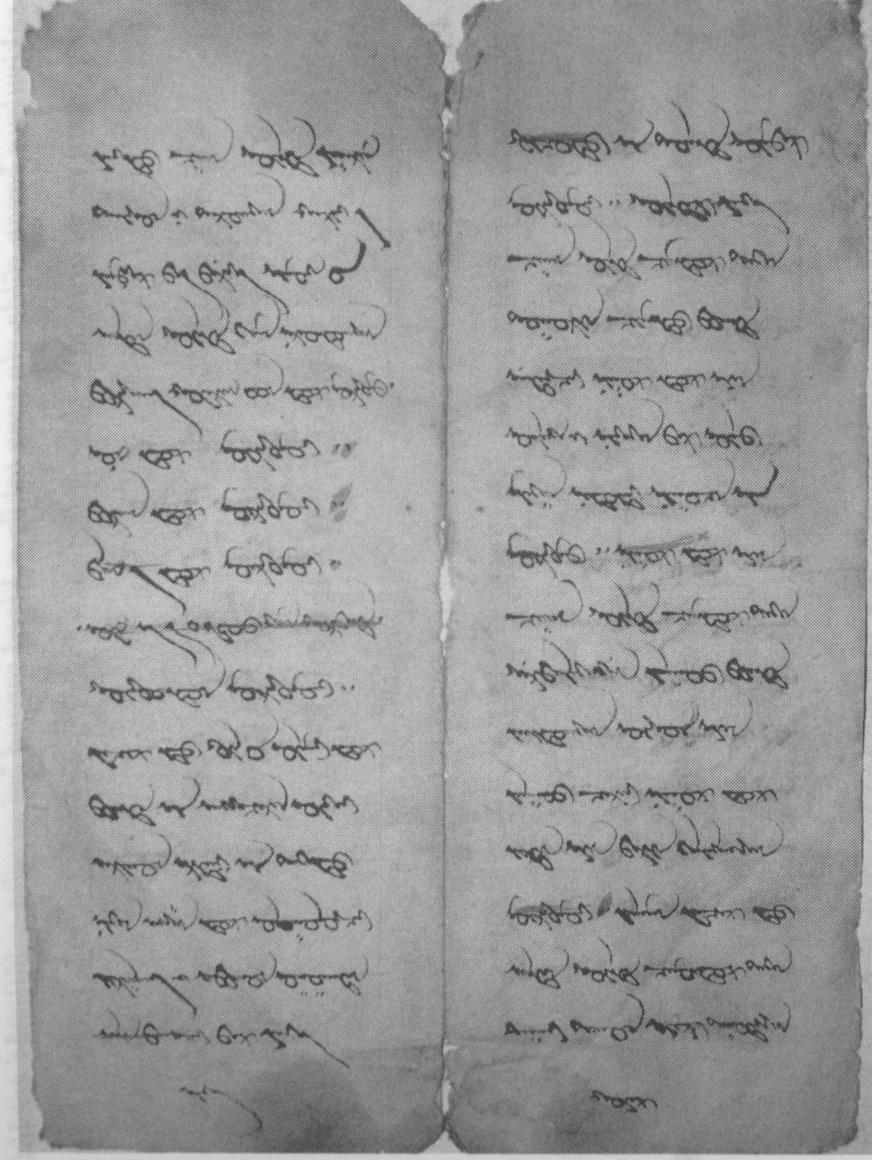


写真3 白いスゥルデの祭祀文書

ボンドン（故人）という人物から譲りうけたという。チャガンボンドンはオールドスで広く知られている文人の1人である。ハスビリクトによると、チャガンボンドンは「白いスゥルデ」の祭祀者旗手からこのテキストを受けとったという。ただし、ハスビリクトがチャガンボンド年から譲りうけた年代、チャガンボンドンが旗手から受けとった年代などは一切不明である。

その後、1997年3月に私が旗手エルケセチェンを訪ねたとき、エルケセチェンは私に「白いスゥルデ」に関する資料を見せた。そのなかに、私がハスビリクトから入手し、今回発表するテキストをゼロックス・コピーしたものが含まれている。エルケセチェンは、コピーをエルクト・ボーシャンより入手したという。かれはその報告書のなかで、ボーシャンからのコピーを収録している（Erkesëcen 1991: 37-41, 50-54）。ただし、エルケセチェンは収録するにあたって、語句の修正をおこなっている。

テキストは頭韻をふむ詩文体である。ハスビリクトもエルケセチェンも、テキストは「典型的」なオールドス・モンゴル風の書き方であることをとくに強調した³²⁾。テキスト最初の1葉目の表に「聖主チンギスの守護神白いスゥルデの献香儀礼および酒、茶、乳製品の種類等を捧げることの習慣作法大全ありき」（Činggis ejen boyda-

yin sakiyulsun čayan sülde-yin sang takily-a kiged sarqud čai sayalin-u jüil-üd-i ergüküi-yin jang yosun tegüs orusiba:) というタイトルがある。その裏は「一」(*nige*) となっている。

テキストを転写するにあたって、アラビア数字は行数を意味する。オリジナルの言語学上の特徴を訂正しなかった。逐語訳をこころみる際、句読点を付けたが、:や::のような本来のモンゴル文句読点と一致させるのは難しい。

4.4.2 朗唱されるテキスト

「白いスウルデ」祭祀において、祭祀者旗手をはじめ、一般の男性参拝者も含め、「モンゴル人男性」全員が朗唱するテキストがある。これを「白いスウルデの献香」と呼ぶ。「スウルデの献香」はオルドスで、最も広く使用されているテキストの1つである。1960年代までは、オルドス・モンゴル人成人男性のなかに「スウルデの献香」が出来ない人はいなかったといわれるくらいである。「スウルデの献香」は毎朝唱えられる。

エルケセチェンによると、「白いスウルデ」祭祀において、ヤルガイチン職がヒツジを殺し丸煮を煮て供物ジュルドを用意した後、参加者全員が「白いスウルデ」の前に座って一斉に朗唱する (Erkesečen 1991: 16-17)。テキストでは、【第一葉】の裏面1行目から【第五葉】の表面8行目までの内容がこれに相当する。

オリジナル・テキストにはタイトルがついていない。エルケセチェンは報告書のなかで、これに「偉大な白いスウルデの献香」(*yeke čayan sülde-yin sang orusiba*) というタイトルをつけている (Erkesečen 1991: 37-41)。興味深いことに、この部分は、モンゴル高原のケルレン・バラス・ホトの「チンギス・ハーンのトゥク守護神廟」(*Činggis-un tuy-un sitügen süm-e*) に保存されていたテキストとほぼ同じである。リンチンによると、ケルレン・バラス・ホトの廟は1863年に建てられたものであり、その祭祀文書はオルドスの八白宮で使用していたものを複写したものである (Rintchen 1959: 9; 60-65)。ケルレン・バラス・ホトのテキストのタイトルは「いにしえの大・小モンゴルのとき、聖主チンギス・ハーンが崇拜していた黄金スウルデの献香」

(*Erte urida yeke bay-a Mongyol-un üy-e-dür boyda ežen Činggis qayan-u sitügsen altan sülde-yin sang orusibai*) である。ケルレン・バラス・ホトのテキストで「黒いスウルデ」(*qar-a sülde*) となっているところが、ハスピリクトからのオリジナル文書では、「白いスウルデ」(*čayan sülde*) となっている。一方、『黄金オルドの祭祀』では、この部分のタイトルを「スウルデの献香」(*sülde-yin sang*) としている (Sayinjiryal &

Šaraldai 1983: 324–329)。

【第一葉 表面】

- 1 *Činggis ejen boyda-yin*
チンギス・エジン・ボクドの
- 2 *sakiyulsun čayan*
守護神である白い
- 3 *sülde-yin sang*
スゥルデの献香,
- 4 *takily-a kiged*
饑礼および
- 5 *sarqud čai sayalin-u*
酒, 茶, 乳製品の
- 6 *jüil-üd-i ergüküi-*
種類等を捧げること
- 7 *yin ĵang yosun*
の習慣作法
- 8 *tegüs orusiba:*
大全ありき

【第一葉 裏面】

nige (一)

- 1 *alin-u ači-bar³³⁾ yeke*
すべての恩恵で大きな
- 2 *ĵiryalang-i abuyad oyuyata*
幸せを選び, 常に
- 3 *nigen agšan-dur oluyulugči³⁴⁾*
一刹那で獲得させる者たる,
- 4 *ariyun erdeni-yin³⁵⁾ degedü*
清らかな宝の(ような)上方
- 5 *boyda-yin anggičira³⁶⁾ ügei*
聖主と一体となった
- 6 *vačir-du³⁷⁾ köl-ün ölmei³⁸⁾-dür*
金剛の垂れ房の足元に
- 7 *sögüddün³⁹⁾ mörgümüi:*

ひざまずいて拝もう。

- 8 *uma a-a huu*⁴⁰⁾ *kemen yurbata*
 ウーマアアアホと3回(繰り返せ)。
- 9 *blam-a-dur mörgümüi.*
 ラマ僧に拝もう,
- 10 *burqan-dur mörgümüi:*
 神に拝もう。
- 11 *nom-dur mörgümüi:*
 経典に拝もう。
- 12 *bursang quvaray-ud-dur mörgümü*⁴¹⁾ .
 仏僧と僧侶たちに拝む。
- 13 *altan sülde kemen nereddüysen*⁴²⁾
 黄金のスウルデと命名された,
- 14 *yambar ba berke simüs-ün*⁴³⁾
 すべての険難な妖怪,
- 15 *dayisun-i daruysan qariy-a*
 敵どもを鎮圧した, 威厳
- 16 *yeketü çayan sülde*⁴⁴⁾ *yayarma*
 大きい白いスウルデ, 急激

【第二葉 表面】

qoyar (二)

- 1 *tayai*⁴⁵⁾ *dayun-iyar dayudaysan*
 な巨音で響かせる
- 2 *altan sülde çamudur*⁴⁶⁾ *takin*
 黄金スウルデ貴方にふたたび
- 3 *mörgümüi. jalaman vaçir-du*⁴⁷⁾
 拝もう。金剛の吹流しをもつ
- 4 *jidan-iyar barin kilinglegsen*⁴⁸⁾
 槍を手にして振りまわし,
- 5 *jalayuu çarai niyur-dur*⁴⁹⁾
 若き顔面に
- 6 *jayiduysan*⁵⁰⁾ *üsün-iyen*
 滑らかな髪を
- 7 *serbeyilgegsen*⁵¹⁾ *jalayuu boyda*
 まっすぐに立てた若き聖なる

- 8 *čayan sülde*⁵²⁾ *čamadur*⁵³⁾ *takin*
白いスウルデ貴方にふたたび
- 9 *mörgümü*⁵⁴⁾: *niyur-dur*⁵⁵⁾-*iyān*
拝む。顔には
- 10 *mingyan nidütei*⁵⁶⁾ *niyuča-yin*
千の眼をもち、秘密の
- 11 *üiles-i nigeken-ber*⁵⁷⁾ *ülü*
行動を1つも
- 12 *endegči niyur-dur*⁵⁸⁾-*iyān*
間違うことなく、顔には
- 13 *toyōrin čimegtü*⁵⁹⁾ *boyda*
丸い飾り（光輪？）をもつ聖なる
- 14 *čayan*⁶⁰⁾ *sülde čamadur*⁶¹⁾ *takin*
白いスウルデ貴方にふたたび
- 15 *mörgümüi: sülde yeke*
拝もう。英知無限の
- 16 *küčütü*⁶²⁾-*yin tulada sümber*⁶³⁾
力をもつことから、須彌

【第二葉 裏面】

- 1 *ayula-yin orgil deger-e sudarsun*
山の頂峰のうえでソダラソン星（の）
- 2 *ejen qayan qormuta tengri*⁶⁴⁾ *emün-e-ben*
エジン・ハーン、帝釈天を（自分の）前で
- 3 *sögüdkegülün bayigsan boyda*
ひざまずかせていた聖なる
- 4 *čayan*⁶⁵⁾ *sülde čamadur*⁶⁶⁾ *takin*
白いスウルデ貴方にふたたび
- 5 *mörgümüi: sayaral ügei joriy-*
拝もう。躊躇することなく（堅い）意志
- 6 *du-yin*⁶⁷⁾ *tulada: sangsar-dur*⁶⁸⁾
あることから、宇宙に
- 7 *yabuyči amitan*⁶⁹⁾ *samayuu*
生きる者たる衆生が騒乱や
- 8 *mayu yeke*⁷⁰⁾ *tulada sakisuyai*⁷¹⁾
悪行が大きいことから、守るように

- 9 *kemegsen boyda sülde čamadur*⁷²⁾ *takin*
 という聖なるスウルデ貴方にふたたび
- 10 *mörgümüi: öber öber-ün*
 拝もう。おのれおのれの
- 11 *šimüs*⁷³⁾ *dayisun olan-u tulada*
 妖怪や敵どもが多いことから
- 12 *olan*⁷⁴⁾ *ridi qobilyan-i qobilyaǰu*⁷⁵⁾
 多くの神力や転生を誕生させ
- 13 *ilegüü dutayuu šimüs*⁷⁶⁾ *-ün*
 余計な妖怪の
- 14 *dayisun-u čereg-üd-i*
 敵どもの軍隊らを
- 15 *unayan sayitur kitugčī*⁷⁷⁾
 倒して、ぱっさりと切る者たる
- 16 *boyda čayan*⁷⁸⁾ *sülde čimadur*⁷⁹⁾:
 聖なる白いスウルデ貴方に（ふたたび拝もう）。

【第三葉 表面】

yurba (三)

- 1 *maday*⁸⁰⁾ *ügei joriy-du-yin*⁸¹⁾ *tulada*
 躊躇することなく（堅い）意志をもつことから
- 2 *mingyan qar-a nidün-iyen*⁸²⁾ *kiligslen*⁸³⁾
 千の黒い眼を輝かせて
- 3 *qaraju mönq ügei olan šimüs-ün*⁸⁴⁾
 見，数えきれないほど無数の妖怪の
- 4 *čereg-üd-i köl dour-a-ban*
 軍隊らを（自分の）足元に
- 5 *mölkügülün*⁸⁵⁾ *keskigsen*⁸⁶⁾ *boyda*
 平伏せさせて踏みつけた聖なる
- 6 *čayan*⁸⁷⁾ *sülde čamadur*⁸⁸⁾ *takin*
 白いスウルデ貴方にふたたび
- 7 *mörgümüi: doyšın yeke kücütü*⁸⁹⁾
 拝もう。孿猛で巨力をもつ
- 8 *yin tulada tongyuriy*⁹⁰⁾ *jīdan-ıyan*⁹¹⁾
 ことから，鋭い太刀と槍を
- 9 *barin kilingleǰü*⁹²⁾ *tüg tümen*⁹³⁾

- 手にして振りまわし千万もの（敵の）
- 10 *čereg-üd-ün teregün-i oytalun*⁹⁴⁾
兵士たちの首を切りとり
 - 11 *möcüglen*⁹⁵⁾ *jegügsen boyda čayan*⁹⁶⁾
（ウマに）つけて飾る聖なる白い
 - 12 *sülde čamadur*⁹⁷⁾ *takin mögümüi*.
スゥルデ貴方にふたたび拝もう。
 - 13 *olan jobalang tan*⁹⁸⁾ *amitan-i*
多くの苦難をもつ衆生たちを
 - 14 *örüşiyen sakiyu*⁹⁹⁾ *-yin tulada:*
寛容に守ることから、
 - 15 *olan ridi*¹⁰⁰⁾ *qobilyan-i yaryaju*¹⁰¹⁾
多くの神力と転生を誕生させた
 - 16 *örüşiyen sakiyçi boyda*
仁愛ある守護神，聖なる

【第三葉 裏面】

- 1 *čayan*¹⁰²⁾ *sülde čamadur*¹⁰³⁾ *takin*
白いスゥルデ貴方にふたたび
- 2 *mörgümüi. jarliy bolun yabuyad*
拝もう。命令となって出発し
- 3 *jaliqai mayu buruyu*¹⁰⁴⁾ *yabudaltan-i*
ずるく，悪い，邪教徒たちを
- 4 *ečülken daruyçi*¹⁰⁵⁾ *boyda čayan*¹⁰⁶⁾
徹底的に鎮圧する者たる聖なる白い、
- 5 *sülde čamadur*¹⁰⁷⁾ *takin mörgümü*
スゥルデ貴方にふたたび拝む。
- 6 *boyda sülde-yin*¹⁰⁸⁾ *jarliy-iyar*
聖なるスゥルデの命令に
- 7 *ülü yabuyçi büküi nom-dur*
従わぬ者，正しい宗教に
- 8 *ülü oruyçi*¹⁰⁹⁾ *buruyu mayu*
入らざる者，邪惡な
- 9 *omoy tan-i*¹¹⁰⁾ *doroyitayulun*¹¹¹⁾
連中を没落させて
- 10 *daruyçi boyda čayan*¹¹²⁾ *sülde*

鎮圧する者たる聖なる白いスゥルデ

- 11 *čamadur*¹¹³⁾ *takin mörgümü.*
貴方にふたたび拝む。
- 12 *edüge*¹¹⁴⁾ *šašin türü-yin*¹¹⁵⁾
この度宗教と政治の
- 13 *eteged mayu*¹¹⁶⁾ *üiledüyci*¹¹⁷⁾
連中, 悪い働きをする者は
- 14 *kem ten*¹¹⁸⁾ *olan bolba*¹¹⁹⁾: *erdem*
極端に増えた。知恵
- 15 *ten*¹²⁰⁾ *sayid čögüdbe*¹²¹⁾.
ある大臣が少なくなった。
- 16 *engke türü šašin-i*¹²²⁾.
平安な政治と宗教を

【第四葉 表面】

dörbe (四)

- 1 *amurliyulugči*¹²³⁾ *boyda čayan*¹²⁴⁾
安定させる者たる聖なる白い
- 2 *sülde čimadur*¹²⁵⁾ *takin mögümü*
スゥルデ貴方にふたたび拝む。
- 3 *qamuy dayisun*¹²⁶⁾-i *ünesün*
すべての敵を灰の
- 4 *tobaray*¹²⁷⁾ *bolyan gituyči*¹²⁸⁾ *doyšin*
廃虚にして切りたおす者たる獐猛で,
- 5 *yeke*¹²⁹⁾ *kücutü boyda čayan*¹³⁰⁾
偉大なる力をもつ聖なる白い
- 6 *sülde čamadur*¹³¹⁾ *takin mögümü:*
スゥルデ貴方にふたたび拝む。
- 7 *üjil yadayuu*¹³²⁾ *qar-a jirüke*
思想が乏しく黒い心 (を)
- 8 *ten*¹³³⁾-ü *omoy-i doroyitayulun*¹³⁴⁾
もつ者たちの勢いを衰弱させて
- 9 *daruyçi boyda čayan*¹³⁵⁾ *sülde*
鎮圧者たる聖なる白いスゥルデ
- 10 *čamadur*¹³⁶⁾ *takin mörgümü:*
貴方にふたたび拝もう。

- 11 *tusatan sayid-un türim¹³⁷⁾-i mandayulugči¹³⁸⁾ boyda¹³⁹⁾*
- 有用な大臣の計略を発展させる者たる聖なる……
- 12 *egün-i edür-ün¹⁴⁰⁾ nigente¹⁴¹⁾ takin*
- これを日に一度
- 13 *čidabasu ebedčün ügei*
- できれば、病気がなくなり
- 14 *erigül engke-ber jiryaju¹⁴²⁾.*
- 清らかに平和に（暮らしを）楽しみ、
- 15 *jobalang ügei jiryalang-iyar*
- 苦難がなく、幸せに
- 16 *jiryaju jod ügei jun namur-*
- 暮らし。（冬の）雪害がなく、（一年中）夏と秋
- 17 *iyar jiryaju¹⁴³⁾: egün-i edür-ün*
- のように暮らし。これを日に

【第四葉 裏面】

- 1 *nigenten¹⁴⁴⁾ takin čidabasu ayuraltu*
- 一度できれば、怒りをもつ
- 2 *dayisun qalayai degerem-e¹⁴⁵⁾ mingyan*
- 敵と盗賊や強盗どもを一千
- 3 *beri¹⁴⁶⁾-yin yajar buruyudduju¹⁴⁷⁾*
- ベルもの（遠い）ところへ遠ざけ
- 4 *qamuy amitan-i qarangyui*
- 一切衆生を暗黒な
- 5 *sangsar¹⁴⁸⁾-ača yaryui¹⁴⁹⁾-yin tulada.*
- 世界から救いたすために。
- 6 *qamuy nom-ud-iyar qariyulun*
- すべての経典等で答えて
- 7 *daruyči¹⁵⁰⁾ yayiqamšiy¹⁵¹⁾ šidetü*
- 鎮圧者たる、驚嘆すべき堅く、
- 8 *boyda čayan¹⁵²⁾ sülde čamadur¹⁵³⁾*
- 聖なる白いスゥルデ貴方に
- 9 *takin mögümüi: kimaraqu¹⁵⁴⁾*
- ふたたび拝もう。混乱（と）
- 10 *temēcildüküi-i¹⁵⁵⁾ amurliyulugči*

闘争を鎮静化させる者たる

- 11 *keletü*¹⁵⁶⁾ *dayisun-u šaligin-i*¹⁵⁷⁾
舌のある敵の弊害を
- 12 *yaryan čegereten-e*¹⁵⁸⁾ *gituyçi*
洗い出して消しさり, (敵を) 切りつくす者たる
- 13 *boyda čayan*¹⁵⁹⁾ *sülde čamadur*¹⁶⁰⁾
聖なる白いスゥルデ貴方に
- 14 *takin mörgümü: eimü*¹⁶¹⁾ *neretü*¹⁶²⁾ *kemen*
ふたたび拝む。こういう名前であると
- 15 *ami nasun-iyän*¹⁶³⁾ *dayadqan*
年齢を (言っ) 祈り
- 16 *jalbarimui*¹⁶⁴⁾: *yerü delekei ulus-un*
拝もう。全地球国家の

【第五葉 表面】

tabu (五)

- 1 *ejin*¹⁶⁵⁾ *boluysan yirtenči-yin sakiyulsun*
主となった, 世界の守護神
- 2 *boluysan yerüngkei ulus-un*
となった, あまねく国家の
- 3 *ejin boluysan uriy-a yeketü*¹⁶⁶⁾
主となった, 召集力を大きくもつ
- 4 *čayan sülde-yin gegen örüšiyejü.*
白いスゥルデの威光が仁愛を示し
- 5 *qan*¹⁶⁷⁾ *-u üris kiged qaraču albatu*
ハンの子孫および普通の庶民,
- 6 *ulus ba qamuy tümen-iyen qayirlan*
国家と全属民を愛護して
- 7 *ibegen suyary-a:: ::*
ご加護を賜るように。
- 8 *manggilama*
吉祥あれ。

4.4.3 秘唱されるテキスト

エルケセチェンの報告書によると, 祭において, 丸煮を盛り, その上に供物ジュル

ドを置く。そしてこれらを「白いスゥルデ」に捧げる。参拝者が9回叩頭する。旗手が煮汁を「9の9」すなわち81回振りまく。つづいて、バクシ職が極めて厳粛な表情で祭史ウチュク (*üčig*) を唱える。エルケセチェンはここで、とくに「厳粛な表情」を強調している。ウチュクが唱えられているとき、参加者全員が服装をととのえてひざまづく。帯をはずして両手でもち、帽子と刀をそばに置く (Erkesečen 1991: 17)。これは、「黒いスゥルデ」の祭祀においても同じである (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 299–300)。

私の調査したところ、祭史ウチュクの内容を決して明晰な口調で唱えてはならない、という新たな情報を得た。チンギス・ハーンの八白宮の祭祀において、「大ウチュク」は早い口調で詠み上げるという (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 169)。私が1992年に八白宮で調査していたときの観察では、ウチュクはだれにも聞き取れないように、細心の警戒のもとで唱えていた (楊 1998: 65)。ホルチャバートルによると、オルドス・ウーシン旗にあるガタギン部の「十三アタガー・テンゲル祭」において、「ウチュクの書」 (*üčig-ün sudur*) は、「秘密の書」 (*niyuča sudur*) とされる。特定の人物以外、ウチュクを見たり覚えたりすることは出来ないことになっていた (Qurčabayatur 1992: 173)。また、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンの祭祀において、ウチュクは、チンギス・ハーンを語るものとされ、秘密を守るために祭祀者は供卓の下に潜り込んで詠むことになっていた (楊 1997: 665)。このようにウチュクは「秘密の歴史」と認識されているのが特徴的である。

テキストでは、【第五葉】の表面9行目から【第九葉】の表面14行までの内容がウチュクに相当する (写真4)。同13行目に「このように聖スゥルデの祭史ウチュク終わり」 (*ene metü boyda sülde öčüg tegüsbe*) とあることから、「聖スゥルデの祭史」 (*boyda sülde öčüg*) をタイトルとして理解してもさしつかえないのであろう。エルケセチェンは報告書のなかで、これに相当する部分に「聖主の白いスゥルデの祭史ウチュク」 (*ejen boyda-yin čayan sülde-yin öčig*) というタイトルをつけている (Erkesečen 1991: 50–54)。

この「聖スゥルデの祭史ウチュク」の内容は、ジャムツァラーノがオルドスより収集した「黒いスゥルデの祭史ウチュク」 (*Qar-a sülde-yin öčig orusiba*) というテキスト (Rintchen 1959: 73–76) と一致するところが多い。また、同じくジャムツァラーノが集めた「黒いスゥルデの祭祀」 (*Qar-a sülde-yin takily-a*) の一部 (Rintchen 1959: 69–70) とも似た表現が目立つ。ジャムツァラーノの「八脚の白いスゥルデの祭祀」 (Rintchen 1959: 71–73) とは、異なった内容である。



写真4 白いスウルデの祭祀文書

ウチュクを唱えるとき女性は排除される。唱え終わったあと参加者全員が一人ずつみずからの父系親族集団名 (*oboy yasu*), 祖先の名, 自分の名, 男子の名と年齢などをスウルデに報告する (Erkesečen 1991: 17)。

【第五葉 表面】

9 *ene metü jalbıran egüsgeküi küsebesü*¹⁶⁸⁾

このように祈りをはじめて祈願し

10 *hüü qay-a*¹⁶⁹⁾ *deger-e yere isün*

さて, 上の99の

11 *tengri tendenče*¹⁷⁰⁾ *šitüküi-dü*¹⁷¹⁾:

天のところから崇拝したとき

12 *Isügei*¹⁷²⁾ *bayatur-ača šitüküi-tü*¹⁷³⁾.

イエスゲイ・バートルから崇拝したとき

13 *yeke sujali*¹⁷⁴⁾ *ijayur-tu boluysan*¹⁷⁵⁾.

偉大な精神 (の) 根本となった

- 14 *yirtenci*¹⁷⁶-*yin ejen boluysan*.
世界の主となった
- 15 *Temüjen suutu*¹⁷⁷ *boyda-ača*
テムジン（という）英明聖主から
- 16 *egüdüysen: deger-e tuluy-un*
創造された上に，フェルトの

【第五葉 裏面】

- 1 *dörbeljin čayan debesger*¹⁷⁸-*ün*
四方形の白い敷物の
- 2 *deger-e saglayar*¹⁷⁹ *modun-u*
上に，茂った木の
- 3 *ičuyur-i bosqaju temürün*
根元を起こして，鉄の
- 4 *qadayasun türü-yin tüšiy-e*
釘（のように），政治の支え柱
- 5 *boluysan. töb-ün yeke ejin-ü*
となった。中央の偉大なる主君の
- 6 *törül törügsen*¹⁸⁰ *degüner*¹⁸¹ *bey-e-yin*
一族親類を生んだ弟たちはわが身の
- 7 *tüsiy-e boluysan: döčin*
支え柱となった。四十
- 8 *tümen-ü tengri-yin sülde boluysan*¹⁸².
万（モンゴル）の天のスゥルデとなった。
- 9 *irtenci*¹⁸³-*yin yeke ejen boluysan*
世界の偉大なる主となった，
- 10 *isün örleüd*¹⁸⁴ *türü-yin tüšiy-e*
九人の将軍が政治の支え柱
- 11 *boluysan.yerüngki*¹⁸⁴ *ulus-un*
となり，全国家の
- 12 *sülde*¹⁸⁶ *boluysan: isün köl-dü*¹⁸⁷
スゥルデとなった九つの脚をもつ
- 13 *čayan tuy*¹⁸⁸-*iyen bosqayad:*
白いスゥルデを立てて
- 14 *möngke tengri-yin jiyayabar*
長生天の運命によって

- 15 *egüdcü*¹⁸⁹⁾: *mongyol ulus-tayan*
創造され, モンゴル国家にとって
- 16 *sülde boluju*¹⁹⁰⁾. *mönggü altan*
守護神とし, 銀, 金

【第六葉 表面】

jiryuy-a (六)

- 1 *erdenes*¹⁹¹⁾-*iyer čimejü. Muyuli*
の宝物等で飾り, ムカライ
- 2 *külüg čing-iyer*¹⁹²⁾. *šang-iyen*¹⁹³⁾
駿馬 (に) 真摯で全財産を
- 3 *bariyuluysan alman*¹⁹⁴⁾ *naran saran*
託した。巨大な太陽 (と) 月の
- 4 *ijayur-du*¹⁹⁵⁾: *almas erdeni-yin*
出自をもち, ダイヤモンドの
- 5 *jirüketü*¹⁹⁶⁾ *ayu bökü ulus-un*
心臓をもち, あまねく国家の
- 6 *ejin boluysan altan sülde-*
主となった黄金スゥルデ
- 7 *dür takin mörgümü*¹⁹⁷⁾: *namurun*¹⁹⁸⁾
にふたたび拝む。秋の
- 8 *naran saran*¹⁹⁹⁾ *gegen gereltü nemer*
太陽 (と) 月の輝かしい光をもち, 蔭
- 9 *yeke ulus-un ejen boluysan*²⁰⁰⁾:
大きい国家の主となった
- 10 *boyda cayan sülde-dür takin*
聖なる白いスゥルデにふたたび
- 11 *mörgümüi*: *nasu büri ten*²⁰¹⁾ *dayisun-i*
拝もう。生涯にわたって敵を
- 12 *doroyitayulugči*²⁰²⁾ *nemer*²⁰³⁾ *yeke*
没落させた者たる, 蔭大きい
- 13 *boyda čayan sülde-dür takin*
聖なる白いスゥルデにふたたび
- 14 *mögümüi*²⁰⁴⁾: *büriy-e uriy-a*²⁰⁵⁾
拝もう。喇叭 (のように) 召集力 (を)
- 15 *yeke-tü*²⁰⁶⁾ *Bojurči Muyuli*²⁰⁷⁾

大きくもち、ポウルチ、ムカライ

16 *qoyar*²⁰⁸⁾ *nöküd tü*²⁰⁹⁾: *bolbasun*

2人の親友をもち、熟した

【第六葉 裏面】

1 *bolud erdeni-yin jiruketü.*

鉄鋼の心臓をもち、

2 *boyda ejin-u yeke çayan*

聖主の偉大なる白い

3 *sülde-dür takin mögümüi:*

スウルデにふたたび拝もう。

4 *qutuytu möngke tengri-yin*

福祿ある長生天の

5 *jiyayabar*²¹⁰⁾ *egüdcü qotala*

運命によって創造されたすべて

6 *bögüde-yin ejen boluysan:*

全部の主となった。

7 *qota balyasun*²¹¹⁾-*i ebden*

都市、町を破壊して

8 *yabuyui-dur*²¹²⁾: *qutuy-tu*

いくとき、福祿

9 *ölji-du*²¹³⁾ *boluysan.boyda*²¹⁴⁾

吉祥となった聖なる

10 *yeke çayan sülde-dür*

偉大な白いスウルデに

11 *takin mörgümüi*²¹⁵⁾: *ündür yeke*

ふたたび拝もう。高く偉大なる

12 *tengri-yin*²¹⁶⁾ *jiyayabar*²¹⁷⁾ *egüdcü:*

天の運命によって創造され

13 *ordus tümen-iyen töblen*²¹⁸⁾

オルドス万戸を中心として

14 *bayiyuluysan: omoy tan*²¹⁹⁾

成立させ、威勢ある

15 *dayisun-i esergücin yabuqui-*

敵を迎えうつ

16 *dur: olja morin-i abquyuluysan*

とき，捕虜と馬をとらせた

【第七葉 表面】

doluy-a (七)

- 1 *boyda čayan sülde čamadur*²²⁰⁾
聖なる白いスウルデ貴方に
- 2 *takin mörgümüi*²²¹⁾: *onun mören-i*²²²⁾
ふたたび拝もう。オノン河に
- 3 *uruyu dobdulqui-dur*:
に沿って攻めたとき，
- 4 *olan ulus-un ejin boyda*:
多くの国の主たる聖なる
- 5 *Činggis qayan-dur*²²³⁾: *olan dayisun-i*²²⁴⁾
チンギス・ハーンに，大勢の敵を
- 6 *doroyitayulun öggüççi: orui-yin ejin boluysan boyda*
没落させてやった者たる，頂点の主となった聖なる
- 7 *čayan*²²⁵⁾ *sülde čamadur*²²⁶⁾ *takin*
白いスウルデ貴方にふたたび
- 8 *mörgümüi*²²⁷⁾: *Börte böčin*²²⁸⁾ *γurban*
拝もう。ボルテ・ブジン (を) 三
- 9 *Merked-i*²²⁹⁾ *dayayulusan*²³⁰⁾: *buyur-a*
メルケト部が連れていった (とき)，ブーラ・
- 10 *keger-e eki selengge uruyu*
ケーレ²³¹⁾，エキ・セレンゲに沿って
- 11 *dobdulqui-dur: bulturil*²³²⁾ *ügei*
攻めたとき，抜けることなく
- 12 *üiledtügçi*²³³⁾: *boyda ejen-ü*
成功させた，聖主の
- 13 *čayan sülde-dür takin mörgümü*²³⁴⁾:
白いスウルデにふたたび拝む。
- 14 *sayibar jāyun aljīyas činü*
よく (貴方の) 百の疲労を
- 15 *šintaryulun*²³⁵⁾ *öggüççi: sayar*
ねぎらってあげて，たゆむ (こと)
- 16 *ügei doluyan on*²³⁶⁾ *ayalan yabuqui-*
なく七年間遠征に赴く

【第七葉 裏面】

- 1 *tur*²³⁷⁾: *šintaryulun*²³⁸⁾ *öggügçi*:
とき, ねぎらってあげた
- 2 *boyda ejin-u čayan sülde-dür*
聖主の白いスウルデに
- 3 *takin mörgümüi*²³⁹⁾: *qar-a Töbed*²⁴⁰⁾ -i
ふたたび拝もう。黒いトゥベトを
- 4 *žorin morduysan-dur qarmai*²⁴¹⁾
目指して出発したとき, 無数の
- 5 *sayidu adayusun*²⁴²⁾ -i
大臣, けものを
- 6 *abquyulugsan*²⁴³⁾: *qamuy bögüden-i*²⁴⁴⁾
服従させた, すべて全部属を
- 7 *doroyitayulun öggügçi: qariy-a*
没落させてやった者たる, 威厳
- 8 *yeketü čayan sülde*²⁴⁵⁾-dür
大きい白いスウルデに
- 9 *takin mörgümüi*²⁴⁶⁾: *dörben tümen*
ふたたび拝もう。四万
- 10 *Orud*²⁴⁷⁾-i *žorin morduqui-dur*.
オイラト部を目指して出発したとき
- 11 *tütel ügei*²⁴⁸⁾ *bayurayulun ögügçi*²⁴⁹⁾.
躊躇なしに打撃を与え,
- 12 *döčin tümen (bečereg-ün*²⁵⁰⁾) *tengri-yin*
四十万 (モンゴルの) 天の
- 13 *küčün luy-a*²⁵¹⁾ *nemejü*²⁵²⁾: *döčin tümen-i*²⁵³⁾
力に加えて, 四十万 (モンゴル) の
- 14 *teregün*²⁵⁴⁾ *boluysan*²⁵⁵⁾: *boyda čayan*
首領となった, 聖なる白い
- 15 *sülde-dür takin mörgümüi*²⁵⁶⁾:
スウルデにふたたび拝もう。
- 16 *qar-a ayula-dur qani ügei*
黒い山 (のなか) に親友なしに

【第八葉 表面】

Naima (八)

- 1 *yabuqui-dur*²⁵⁷⁾ *qadan čereg-i*
 いったとき、石（のように堅い貴方の）軍隊を
- 2 *činü tögerün*²⁵⁸⁾ *yabuyči*²⁵⁹⁾:
 指揮していった者たる、
- 3 *qariy-a yeketü sülde-i*²⁶⁰⁾ *činü*
 威厳大きい（貴方の）スウルデを
- 4 *qadayalan yabuyči: eke qadayatu*²⁶¹⁾
 もっていった者、母、重要人物（と）
- 5 *ayula açınar činü mörgün öcünem*²⁶²⁾:
 （貴方の）正統の子孫たちが叩頭して述べよう。
- 6 *ündür ayulan-dur*²⁶³⁾ *daban yabuqui-*
 高い山に登っていった
- 7 *dur*²⁶⁴⁾ *ösbüri čereg-i činü*
 とき、（貴方の）増えた軍隊を
- 8 *tögerün yabuyči: ündür yeke*
 指揮していった者たる、高く偉大な
- 9 *sülde-dür ömçitü*²⁶⁵⁾ *ayul açınar*²⁶⁶⁾
 スウルデに、封地をもつ（貴方の）正統な子孫たち
- 10 *činü mörgün öcünem*²⁶⁷⁾ :: *sary-a*²⁶⁸⁾
 が叩頭して述べよう。淡黄色の
- 11 *ajary-a*²⁶⁹⁾ *-yin kögül-iyer qolbay-a*
 種雄馬のたてがみで綱
- 12 *bolyagsan*²⁷⁰⁾ : *kelekü böğüde-yin ejin*
 とさせた、話す者すべての主
- 13 *boluysan*²⁷¹⁾ : *kim ügei*²⁷²⁾ *olan dayisun-i*
 となった、限りなく大勢の敵を
- 14 *doroyitayulun ögügcü*²⁷³⁾ .*gegen*
 没落させてやった者たる、輝かしい
- 15 *ijayur-tu boyda çayan sülde-dür*
 出自をもつ聖なる白いスウルデに
- 16 *takin mörgümüi: çayan*²⁷⁴⁾ *ajary-a*²⁷⁵⁾ *-yin*
 ふたたび拝もう。白い種雄馬の

【第八葉 裏面】

- 1 *kögül-iyer qolbay-a bolyagsan*²⁷⁶⁾
 たてがみで綱とさせた

- 2 *qamuy bögüde-yin ejin boluysan:*
すべて全属民の主となった,
- 3 *qarmai²⁷⁷⁾ bögüde-yin oroi-yin čimeg*
広く全部属の頂点の飾り
- 4 *boluysan²⁷⁸⁾: qaratan dayisun-i*
となった, 悪人, 敵を
- 5 *qalyayilayal ügei doroyitayulugči²⁷⁹⁾*
容赦なく没落させてやった者たる
- 6 *qariy-a yeketü čayan sülde*
威厳大きい白いスウルデが
- 7 *žoriy meden ilyatuyai²⁸⁰⁾: qamuy*
自由に勝利するように。すべての
- 8 *dayisun-i ečülesen²⁸¹⁾ daruyči:*
敵を破壊して鎮圧し,
- 9 *qamuy sedkigsen žoriy tusa-i²⁸²⁾*
すべての感じられた意志と役割を
- 10 *dzindamuni²⁸³⁾ metü güiçidgeyči:*
如意のように完成させた者たる,
- 11 *qatun köbegün²⁸⁴⁾-i²⁸⁵⁾ oljan bolyagči²⁸⁶⁾:*
妃と王子を捕虜と為した者たる,
- 12 *qamuy ulus-iyän yabiy-a-du²⁸⁷⁾*
すべての国を功績ある
- 13 *bolyagči²⁸⁸⁾.qariy-a yeketü čayan*
と為した者たる, 威厳大きい白い
- 14 *sülde-yin²⁸⁹⁾ žoriy meden ilyatuyai:*
スウルデが自由に勝利するように。
- 15 *ündür yeke ayula-yi²⁹⁰⁾ uruyu*
高く大きい山を目指して
- 16 *dobdolyui²⁹¹⁾-dur ökin köbegün²⁹²⁾-i²⁹³⁾*
攻めていくとき, 女と子供を

【第九葉 表面】

isü (九)

- 1 *olja bolyaqui²⁹⁴⁾-yin tulada:*
捕虜と為すため
- 2 *öber-ün ayul açinar²⁹⁵⁾ činü*

- 貴方の正統な子孫たちが
 3 *mörgün öcünem*²⁹⁶⁾ *.öljyitü*²⁹⁷⁾
 叩頭して述べよう。幸せ
 4 *boluysan.čayan sülde-yin joriy*
 となった、白いスウルデが自由に
 5 *meden ilyatuyai*²⁹⁸⁾ : *qan ayul*
 勝利するように。ハンの正統な
 6 *ayul açınar*^{1R}²⁹⁹⁾ *činü mörgün*
 正統な子孫たちが叩頭して
 7 *öcünem*³⁰⁰⁾ : *qarayalan*³⁰¹⁾ *obuyarču*
 述べよう。眺めて集まり
 8 *qadayalan yabuyui-tu*³⁰²⁾ : *qanitan*
 手にしていくとき、親友
 9 *nöküd-dü*³⁰³⁾ *künisü*³⁰⁴⁾ *yekeken*
 幕僚たちに、大いなる食餐
 10 *jıyayagçı*³⁰⁵⁾ *qariy-a yeke-tü*
 (となった) 好運者たる、威厳大きい
 11 *čayan sülde joriy meden*
 白いスウルデが自由に
 12 *ilyatuyai*³⁰⁶⁾ :: … :: … :: … :: … ::
 勝利するように。
 13 *ene metü boyda sülde öcüg*
 このように聖スウルデの祭史
 14 *tegüsbe*³⁰⁷⁾ : *manggilama* :
 終わり。吉祥あれ。

4.4.4 その他のテキスト

オリジナル・テキストの【第九葉】の表面15行目には「献香の儀礼これなり」(*ub-sang-un takily-a anu*) とある。これ以降の部分には「献香の儀礼これなり」というタイトルをつけることができよう。このテキストは【第十葉】の表面14行まで続く。エルケセチェンの報告書にある「偉大な白いスウルデの献香の儀礼これなり」(*yeke čayan sülde-yin sang-un takily-a anu*) と題するテキスト (Erkesečen 1991: 42–45) の一部分と、ほぼ同じである。

また、【第十葉】の表面15行目から文書の最後まででは、モンゴル語でラシ (*rasi*)

と呼ばれる部分である。

【第九葉 表面】

- 15 *ubsang-un takily-a anu*
献香の儀礼これなり。
- 16 *oma a-a. hūü kemen γurbata:*
オマ アーア ホーと三回。

【第九葉 裏面】

- 1 *boyda blam-a idam γurban*
聖ラマ, イダム, 三
- 2 *erdeni: bodisadu³⁰⁸⁾ arban жүг-үн*
宝, 菩薩, 十方の
- 3 *erkim be: burqan bayši-yin šajin*
尊貴と, 仏師の宗教
- 4 *nom-ud ekilen.bürin ende*
経典らをはじめ, ことごとくここに
- 5 *suyarqaju eriydün: nom-un bey-e-yin*
ご光臨なされ。経典の身体が
- 6 *amur jiyar³⁰⁹⁾ ečikin: nom-un kücün*
静かに天竺へいくように。経典の力が
- 7 *tegüsüysen³¹⁰⁾ sülde ner: nom-un*
貫徹されたスゥルデたち。経典の
- 8 *nom-un šajin sakiyulugsan³¹¹⁾ nöködner³¹²⁾ nom-un*
経典の宗教が守護神とする幕僚たち, 経典の
- 9 *delger orun ende oruši:*
広い世界がここにご降臨なされ。
- 10 *sayin-u amur ayuu yeke*
良い平和が偉大な
- 11 *dabčang-tur³¹³⁾: sang-un oyuyud³¹⁴⁾*
経箱に, 香のすべての
- 12 *jüil-ün ed-i³¹⁵⁾ sang-un ünüd*
種類のを (燃やして), 香の匂いらが
- 13 *uyturyui-yi degürgen: seçen*
頂点を満たすように。賢明な

14 *qamuy sülde ner-i takimui:*

すべてのスウルデらを祭ろう。

15 *jiyayan³¹⁶-u amur sayin-u³¹⁷*

幸せな良い平和の（お蔭で）

16 *jedger³¹⁸ yamšiy mayu iru-a-i³¹⁹*

障害，天災と悪兆を

17 *qariyul: jiči basa amin nasu-i³²⁰*

遠ざけ。さらにまた寿命を

18 *urtudy-a³²¹: jil büri amur*

長らえるよう。毎年平和で

【第十葉 表面】

arba (十)

1 *jiryal boltuyai: qani nökü³²⁰*

幸せになるように。親友と幕僚を

2 *onča nadur qayirla: qamuy*

より一層いたわるように。すべての

3 *kešig buyan čoy-i qayirla³²³*

恩賜と福祿と威光を賜るように。

4 *qan-u iru-a kele aman-i³²⁴ usady-a:*

ハン（にとって）の（悪い）兆候，中傷を断絶させよう。

5 *qari³²⁵ sedgel boyumtasun šilay-a³²⁶*

退廃の考えが（頭に）つまった姦邪な

6 *qaril ügei jörčin angči³²⁷ dayisun-i*

救いようのない邪悪な敵どもを

7 *qar-a жүг-үн erkisildür bolyagči³²⁸:*

黒い方向の管轄下に為す者。

8 *qari dayisun dojšin бүкүи*

悪敵，凶悪な（者）すべて（を）

9 *bürilge: burqan bayši-yin šajin nom-i*

消滅せよ。仏師の宗教と経典を

10 *s(t)akiju³²⁹: boyda sülde tümen yuyan*

守り（祭り），聖なるスウルデが万衆を

11 *dedgüjü tengri kümün öljü³³⁰*

助け，天の人，吉祥が

12 *mandur³³¹ ibege: dengsel ügei*

我々を加護するように。苦難のない

13 *mör-ün ölji qutuy oruši:*

道の吉祥と福祿が光臨するように。

14 *manggilama*

吉祥あれ。

15 *yerü-yin sang büged.*

平常の献香と

16 *burqan nom ba qovaray:*

仏，經典と僧侶，

【第十葉 裏面】

1 *abural-un orun bodi kürtel-e*

極楽の世界の菩提にいたるまで

2 *itegemüi: ünen yurban erdeni.*

信じよう。真の三宝，

3 *ünen nom-un činar ba:*

真の經典の本質と，

4 *ülemjite sedkel-ber üjetel-e*

豊かな意志でもって万象の

5 *emön-e üleši ügei qarši*

前に心残りなしの障害（？）

6 *ba: ündür ayuu debisger:*

と，高く偉大なる台座

7 *üjisegüleng-ün takil-un ed:*

美しい祭祀の器具，

8 *ündüsün-ü viši-tür: ünemleküi*

根本の境界に，正真正銘の

9 *jiryalang ürgüljiten edeleküi yeke*

幸せが引き続き実り，大きい

10 *dalai boltuyai:: …:: …::*

海となるように

11³³²⁾

12

13

14

5 おわりに

以上、本論文は現在オルドス・ウーシン旗にある「白いスゥルデ」祭祀について、祭祀者集団、祭祀の期日、祭祀における特殊の供物と職掌に注目し、祭祀テキストを呈示しながら述べてきた。それによって、以下のことが明らかになった。

第1、オルドス・ウーシン旗にある「白いスゥルデ」の祭祀者集団は、モンゴルのチャハル部を本来の出自とし、リクダン・ハーンの追随者であった。「白いスゥルデ」は元来、大ハーンの駐在するチャハル部によって維持されていた。チャハル部には、後金国に激しく抵抗した歴史がある。そのため、「白いスゥルデ」祭祀活動は衰退を余儀なくされ、きわめて限られた範囲内でしかおこなわれなくなった。オルドスのウーシン旗で祭祀活動が再開されてから、サガン・セチェン・ホン・タイジに属するガルハタン部は、積極的に関与した。このことは、歴史家サガン・セチェン・ホン・タイジとチャハル部との関係を物語る材料ともいえよう。

第2、「白いスゥルデ」の祭祀者集団は、旗手「トゥクチ」と自称する。現在における旗手集団内の職掌は、種類が単純で、組織的にもゆるやかである。しかし、特殊な職掌ジョリクの存在と、祭祀におけるジョリクの活躍は、大きな意義をもつ。ジョリク職は、モンゴルにおける最高級の供物ジュマをあつかい、生贄を演じる。「白いスゥルデ」祭祀の神聖性は、特別な職掌ジョリクと特殊な供物ジュマに集約代表されている。

第3、「白いスゥルデ」の祭祀テキストは、「朗唱の部分」と「秘密の部分」からなっている。「朗唱の部分」は、これをモンゴル族男性全員が斉唱することによって、相互の連携とアイデンティティを確認するものである。これに対し、「秘密の部分」では、チンギス・ハーンの「正統の子孫たち」(*ayul acinar*)とチンギス・ハーンひいては天とのつながりが強調されている。

第4、ホルチャバートルの推察によると、「白いスゥルデ」はチンギス・ハーン一族を生んだボルジギン部 (*Borjigin oboy*) のスゥルデであった (*Qurčabayatur & Üjüm-e 1991: 61*)。『モンゴル秘史』はボルジギン部を最初から「輝かしい骨」(*kiyan yasu*)、「白い骨」(*čayan yasu*)と位置づけて記録を展開している。そのため、「白いスゥルデ」は「白い骨」集団ボルジギン部のスゥルデであったという理論である。ホルチャバートルはさらに「白いスゥルデ」と軍神「黒いスゥルデ」との関連について、「黒いスゥルデ」は元来チンギス・ハーンの宿敵ジャムハの軍神であったの

を、チンギス・ハーンがジャムハを鎮圧した後、その軍威を借りようとしてみずからの軍神に改造したのではないかと主張している (Qurčabayatur & Üjüm-e 1991: 60-61)。

中央アジアの諸民族のあいだでは、「白い骨」は「優越クラン」や「優越血筋」を意味する (Krader 1963: 134)。その意味で、「白いスウルデ」は元来「白い骨」という「優越クラン」のシンボルであったのに対して、「黒いスウルデ」の方は軍の威力を示す存在であったという、ホルチャバートルの見解は的を得ているといえよう。

第5、軍神「黒いスウルデ」は、オルドス以外には存在しない。それは、「黒いスウルデ」を全モンゴル軍の軍神とされている以上、軍威と武力を確保するため、決してその威力の分散を許されなかったのであろう。これに対して、国旗「白いスウルデ」はモンゴル各地でその存在が報告されている。ジャムツァラーノによると、「白いスウルデ」は、外モンゴルのハルハ各旗に分散させたとの情報もあるという (Жамцарано 1961: 233)。「白い骨」を象徴する「白いスウルデ」は、「白い骨」出自のチンギス・ハーン一族の者が各集団を支配するように、モンゴルの各集団を統合するシンボルとなって分散していったのであろう。

今日、モンゴル各地各集団のなかに見られる「白いスウルデ」はまさにその系統を受けついだものであろう。

謝 辞

貴重な資料を提供してくださったハスピリクト氏、エルケセチェン氏に衷心より感謝の意を表したい。

注

- 1) 私は以前「黒いスウルデ」を「黒三叉」と表現した (楊 1995b: 27-54) が、本論文では「白いスウルデ」と対応させるため、統一して「黒いスウルデ」とする。
- 2) 現行のモンゴル国憲法では、モンゴルが統一されて以来伝承されてきた「偉大なる白いトゥク」は、モンゴル国の「政治における尊い象徴」 (*törü-yin kündüdkel-ün belgedel*) であると位置づけている。また、同憲法では、国旗をダルバー (*törü-yin dalbay-a*) と呼んでいる (『Mongyol Ulus-un Ündüsün Qauli』1992: 43)。チンギス・ハーン生誕830周年を迎え、大規模な記念式典がおこなわれた1992年5月に、伝統的な軍神と国旗が復活した。『モンゴル月報』によると、1992年5月5日、大統領令によりモンゴル全軍の「黒旗」を国防相に、国家儀礼用の「白旗」を第32部隊にそれぞれ授与する式典が国防省でおこなわれた (外務省ア

ジア局中国課 1992: 21)。

- 3) 原文は“*Tedüi darui-dur onon mören-ü terigüne bayilyan qadyuysan yisün köl-tü çayan tuy-ıyan bosyan*” (そのときすぐにオノン河の上流にあった九脚の白いトックを立てて) とある。モスタートはオルドスから『蒙古源流』の写本を3種類もちだしている。1206年の大ハーン即位時の記事は、ウーシン旗ドガール・ジャブ・タイジより入手した版本 (Erdeni-yin Tobči, Part II, Manuscript A) では71頁, オトク旗のメーリン・ジャンギより入手した版本 (Erdeni-yin Tobči, Part III, Manuscript B) では63頁, ハンギン旗の版本 (Erdeni-yin Tobči, Part IV, Manuscript C) では75頁にそれぞれ見られる。江實が訳注した版本では1206年の記事以外に, 「巻の四」でチンギス・ハーンがタングート遠征に赴くときにも「9脚の白いトック」を立てたという記述がある (江 1940: 59) のに対して, モスタートが収集した三版本にはいずれも該当記事が見あたらない (Sayang Sečen 1956: Part II: 100-101; Part III: 88-89; Part IV: 101-103)。
- 4) 各史籍の成書年代については諸説あるが, ここではそれぞれの校注者あるいは整理者の説にしたがう。
- 5) ウラジミルツォフは, 1913年にウンドゥル・ハンガイ地域を訪れている。かれは, 当時のウンドゥル・ハンガイ地域の行政単位を「ハルハ北西のゴ・サイトのホシュー (旗)」と表現している (ウラジミルツォフ 1941: 331)。当時の外モンゴルにおいては, 旗名をその支配者の名で呼ぶのが一般的であったようである。ロー・ジャンジュンの次男の名はゴンチクダンバ (Gončiydamba) で (Tümenjiryal 1989: 6-7), いわゆるゴ・サイトとは, おそらくこのゴンチクダンバを指すものであろう。
- 6) アヤガ (*aya*) とは木碗であり, アヤガチンは宴会に携わる係の一種であろう。
- 7) 「白いスゥルデ」が最初からラマ僧に祭られてきたのか, それともモンゴル帝国の首都カラ・コルムでラマ教寺院エルデニ・ジョーが造営されたりしたラマ教の盛期に, 祭祀者がラマ僧に転向したかどうかは不明である。外モンゴルにもかつてはチンギス・ハーンの遺品を祭る祭祀者集団が各地に分布していた。これらの祭祀者たちは清朝の弾圧から逃れるために, 仮にラマ僧の身分を名乗ったともいわれている。
- 8) モスタートがウーシン旗からもちだした馬乳酒祭に関するテキストのなかには, 馬乳酒祭において馬乳酒を振りまいて捧げる聖なる対象のなかに, 「白いスゥルデ」が含まれている (Serruys 1974a: 64)。
- 9) ムー・ブラクとは, 「悪い湧き水」の意味である。
- 10) いわゆる「五色の史書」とは, 「青い歴史」(Köke Teüke) すなわち『Subud Erike』, 「赤い歴史」(Ulayan Teüke), 「白い歴史」(Čayan Teüke) すなわち『十善白史』, 「黄色い歴史」(Sira Teüke) すなわち『蒙古源流』, 「褐色の歴史」(Boro Teüke) の5つである (Mostaert 1956: 37-38)。現在ウーシン旗在住の旗手ソニト老によると, ソニトの父ロンホダイが1950年代以前にチャハル・ハラーの長官ジャランをつとめていたころ, 「白いスゥルデ」祭祀に関する文書類は大きな布に包んで保管されていた。共産党政権が成立した直後の1950年, まずスゥルデが倒され, 各種文書はウーシン旗のシニ・スゥメ寺に運ばれて焼かれたという。1966年, 「文化大革命」期に入ると, 鎧と弓矢は焼き払われ, 剣は「トリ公社小学校」の倉庫に放置してあったというが, その後どうなったか, いまだに不明である。
- 11) モンゴル国西部ウンドゥル・ハンガイ地域の「白いトック」にも, 白い馬に武将が跨がるモチーフの絵があった (Tümenjiryal 1989: 34)。ハイシヒヒによると, デンマークの王立地

理学研究所のハズルンド (Haslund) が1938年から1939年にかけて内モンゴルのチャハルとオルドスを旅行した際に撮影した写真は、現在デンマークの国立博物館 (Danischen National Museum) に保管されているという。そのなかに遊牧をしていたダルハトたちを含む祭祀関係の内容も見られる。興味深いのは、2枚の古い絵を写した写真である。写真から見る限り、祭祀者らしき人物の背後にスゥルデのようなものがある。スゥルデには、白馬に武装人物が跨っているモチーフが描かれている。ハイシツヒはこれを「黒いスゥルデ」に想定したうえ、白馬に騎士というモチーフは中央アジアに広く存在する「ゲセル・ハーン英雄物語」のイメージだと指摘している (Heissig 1984: 19-25)。チンギス・ハーンの祭殿八白宮をはじめ、オルドス地域にある様々な祭殿オルドには、古い絵画を保存し祭っていた (ホルチャバートル&楊 1997: 69-77)。

- 12) 森川は、諸々の歴史資料を検討したうえ、オルドスのリンチン・ジノンは、このとき王子エルケ・ホンゴルと手を組もうとしたことは間違いないと主張している (森川 1990: 56-57)。
- 13) ウーシン旗チャハル・ハラールの4つのソムとは、第1ソム、第2ソム、第3ソム、それにジュルジャガ・ソムであった。第1ソムはトックチ (旗手)・ソムともいう。
- 14) オルドスにはチャハル・モンゴル族とリクダン・ハーンに関する伝承が多く、リクダン・ハーンの遺留品とされる聖物も多い (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 409-410)。
- 15) 清朝時代、オルドス部に対する周辺からの監視は厳しかった。陝西省北部の神木県に駐在する神木理事大臣は、もっぱらオルドス東部の三旗を監視する役であった。1824(道光四)年、神木理事大臣と綏遠將軍が連名で道光皇帝に上書し、八白宮の祭祀者ダルハトの爵号は「朝廷大号」(政治的爵号)であることを理由に、使用の禁止を提案したところ、許可された。この件は全モンゴルの反発をまねいた。1826(道光七)年、ハルハ・モンゴルのセチェン・ハン、ジャサクト・ハンをはじめとする総計10盟の王公らが上奏したことにより、翌年道光皇帝はついに禁止令を撤廃した (Narasun 1993: 54)。
- 16) ウーシン旗にはつぎのような10のハラールがあった。それは、ウーシン、ウイグルチン、ガルハタン、ピストゥ、チャハル、イケ・ケレイト (大ケレイト)、バガ・ケレイト (小ケレイト)、ドトライ (Doturai)、トゥス・ドトライ (Tus Doturai)、クンディ (Köndei) である。ウーシン、ウイグルチン、ピストゥ、ガルハタン、チャハル、大小両ケレイトなど、すべて部族集団の名称である。ドトライとは「内部」の意で、トゥス・ドトライとは「正中心」の意味であり、旗王直轄のハラールであった。クンディの原義は不明であるが、ウーシン旗最後の旗王ヨンルンノルブの回想によると、このハラールは清朝中期以降に形成されたという (Yöngrinorbu 1986: 97)。ハラールは、いくつかのソムから構成されていた。オルドスの場合、1つのハラールは通常4~5のソムからなる。
- 17) トゴとは「鍋」で、トゴトゥとは「鍋のあるところ」との意味である。シルデクは「ウマの鞍敷き」である。いずれもかつてリクダン・ハーンの軍隊が遺留したものと伝わっている。トゴトゥは現在行政組織上、ウーシン旗のナリン・ゴル郷に属する。ナリン・ゴル郷の住民の98パーセント以上が漢族である。大量の漢族に囲まれている旗手たちの放牧生活はきわめて困難な状況にある。1991年、私が調査していた時期、かれらのうち家畜頭数が100を越える者はなく、ウーシン旗のなかでも貧困層に入る。草原がほとんど漢族農民に占領されたためである。かれらは現在ナリン・ゴル郷から離脱してその北のトリ郷に加入しようと旗政府にはたらきかけている。トリ郷の方はモンゴル族人口が多いからである。
- 18) 清末の漢族侵入によって、集団全体で北へ移り、1937年まではウルン、ジャングト、シャ

ラムド盆地にとどまっていた。やがて共産党のオルドスへの浸透にともなう、大量の漢族がウーシン旗南部に進出したため、無定河を渡り、チョーダイ、オトク旗の南部に居住しはじめた。ガルハタン部は長城の南に住んでいたところから、アンバイ・オヴォを祭ってきたという。

- 19) この点に関して、森川による最新の論考がある。森川は、サガン・セチェンが如何なる目的で『蒙古源流』を編纂したかを論じた際に、つぎのように指摘している。種々のモンゴル年代記のリクダン・ハーンに関する記述を比較したところ、サガン・セチェンの場合は、リクダン・ハーンを直接批判する記述がない。それはチャハル王家にシンパシーをもち、かつてリクダン・ハーンと行動をともしたオルドス王家の一員としてのサガン・セチェンにとっては、リクダン・ハーンの事績を批判することができなかつたからであろう、という（森川 1997: 112-113）。
- 20) 森川は、エリンチンをホトクタイ・セチェン・ホン・タイジの次子シダタイ・セチェン・ホン・タイジの孫とするが、これは、森川の依拠している『金輪千輻』の記載（Dharm-a 1987: 211）に誤りがあるためであろう。
- 21) チンギス・ハーンの軍神「黒いスウルデ」と国旗「白いスウルデ」は、ある一定の時期になるとモンゴル各地を巡回する。その際互いに遭遇しないように祭祀者たちが厳重に注意をはらう。とくに軍神の方が国旗より威力が強いとされていたため、「白いスウルデ」の方が避けていたと伝えられている。エルクート人がダルハトから逃げるのはむしろこのためであって、ネストリウス信者であるから回避していたのではない、との説明を受けたこともある。
- 22) サインジャラガルとジャラルダイによると、オルドスのテレングース部は、内部で「白いテレングース」と「灰色のテレングース」に分れている。「白いテレングース」は、稲妻を出迎える役（*uytuyul*）をし、「灰色のテレングース」は見送る役（*üdegül*）である。「出迎え」役と「見送り」役は雷神と直接交流できるシャマン職である。雷が止まないときには、ドーダーチンは右腕を肩まで露わにし、30センチメートルほどのやじりと、「天の矢」を手にして空に向かい、「アタガー・テンゲルの父よ、こんなに子孫をいじめるのか」と叫ぶ。そして「大海の彼方、くずれた鼻をした、縞模様の足をした、左前に服を着た者（すなわち漢族）の上へ行け！ハデ！ハデ！」と稲妻を導く役をつとめていた。雷を誘導する際に使用されるやじりは、シャマン専用の道具であるが、氏族会議の席上、これを使ってみずからに与えられることになっている肉の部位（*yamu*）を正確に探しだすことによって、同一集団の者を確認しあう（Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 456-457）。また、落雷による死者が出たら、ドーダーチンはウマ取り竿（*ury-a*）を使って決められた距離を測ってそれを埋葬する。墓の上にハラガナク（*qaryanay*）という灌木を束ねて三角形をつくり、81個の十字（*tonolji*）を型どる（Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 455-457）。これは普通の葬式とはまったくちがって、非常死に対する処理法である。ブリヤート・モンゴル族もまた、落雷のあった場所からは居を移し、その際「雷神の矢」を天に送り返していた（ハルヴァ 1991: 198）。ドーダーチンがつくる灌木の三角形も「雷神の矢」の一種であろう。ドーダーチンは職名で、テレングースが本来の父系親族集団名であったにもかかわらず、現在ではほとんどのドーダーチンは、本来の父系親族集団名テレングースを忘れている。
- 23) ウーラガには重要な儀礼的要素が見られる。たとえば、テレングース部のドーダーチンはウーラガをつかって落雷による死者の処理にあたる。
- 24) オルドス暦については、Qurča (1988) を、モンゴルの月名については、小林 (1957) を

参照されたい。

- 25) 祭祀において、参加者が時計回りに回る儀礼は広く見られる。モンゴル高原からシベリアにかけて見られるシャマンの「叙品式」において、シャマンは白樺の樹をめぐって9回まわる。1回ごとに天の一層に到達し、しだいに昇天すると信じられている（ハルヴァ 1991: 442-443）。『周書』によれば、古代トルコ（突厥）のハーンが即位する際、臣下らに担がれて太陽の運行方向にしたがってまわっていた（『周書』 1971: 909）。モンゴル族を含む遊牧民のハーンは「天命を受けた」、「天より生成された」、「天のハーン」などの称号をもち、天との合一を強調する（松原 1991: 421）。
- 26) バーレン (*bayarang*) とは悪罵ことばで、オルドス・モンゴル語で「くそつたれ」の意味である。民間ではもっぱら漢族に対してだけ使う。
- 27) エルケセチェンは、アルタン・トゥシ (*tüsi*) としている (Erkesečen 1991: 23)。
- 28) サインジャラガルは、「白いスウルデ」はオルドス地域で祭られて数百年間たったため、ダルハトたちの主宰するチンギス・ハーンの軍神「黒いスウルデ」祭祀の影響が濃厚であると指摘している (Sayinjiryal 1992: 33-35)。確かに両者の「血祭」において、スウルデに向かって血を振りかける儀礼や唱えられる祭詞はほとんど同じであり、祭祀の目的と運営にも共通した要素が見られる。それは「黒いスウルデ」からの影響というよりも、スウルデあるいはトウクの祭祀に共通して存在した儀礼であろう。
- 29) オルドスでは、結婚式や宴会へ贈物として持参するヒツジの丸煮をジュルマン・シュース (*juluman sigüsü*) という (Namjildorji 1992: 256)。ジュルマを「赤裸のジュルマ (ジュマ)」 (*nöcigün julma*) とも表現する (Mostaert 1941: 218)。また、モスタールトの収集した文書のなかに含まれる結婚式に関するテキストのなかには、「赤裸のジュルマと牛の乾肉をはじめとする9つ」 (*ničügün julma üker qatayuu terigülen nige isü*) とある (Serruys 1974b: 274)。
- 30) 私は、このことばはおそらく *tögegeli* (分け前) の書写ミスであろうと理解している。
- 31) 以前、ヤムという「尊い食べ物」について論じたことがある。ヤムは専らチンギス・ハーンをはじめとする大ハーンから祭祀者に下賜された恩賜である (楊 1997: 660-663)。それに対してジュマを使用するのは、「聖なる貴族」 (*boyda noyad*) 自身である。
- 32) テキストのもつ言語学上の主な特徴は以下のとおりである。
- 1: 母音 *e* と子音 *s* は、つづり上の形は似かよっている。
 - 2: 子音 *y* と *j* の区別が明確ではなく、*j* を *y* のように書いている。
 - 3: 軟口蓋音 *g* と口蓋垂音 *ɣ* (*G*) をさほど厳密に区別して使用していない。
 - 4: 語末形における *ɣ* (*G*) と *n* と *l* の外見はほぼ同じである。とくに、ウーシン旗では *n* を *l* のように書くのが一般的であった。
 - 5: 与位を表す *tu* と *du* は、ほとんどすべてが *du* となっている。
 - 6: 一部において、たとえば【第五葉】の表面10行と12行の *isün* と *isügei* の例が示すように、*yi* を *i* と書いている。
 - 7: オルドス・モンゴル語口語発音からの影響が見られる。その実例として、たとえば【第五葉】の裏面1行の *debisger* を *debesger* と、【第九葉】の表面10行の *jayay-a* を *jiyay-a* としている点がある。文語表記の *ja* と *je* を *ji* と発音するのもオルドス・モンゴル語口語発音の特徴である。テキストでは、とくに *ejen* をほとんど *ejin* と表記しているのも、その実例である。
 - 8: 現在では *j* と表記する子音を *č* と記している。たとえば【第五葉】の裏面3行の *ijayur*

を *ičuyur* とつづっている。また【第五葉】の裏面15行の *egüdcü*, 【第六葉】の裏面5行と12行の *egüdcü*, 【第九葉】の表面7行の *oboyarču* などがある例である。オルドス・モンゴル語口語では文語の *č* を *j* と発音する。

- 9: 対格語尾を属格語尾として使用し、属格語尾を対格語尾として使っている例も見られる。例えば【第七葉】の裏面13, 14行の *döčin tümen-i teregün boluysan* の *i* は対格ではなく、属格として理解した方が適当であろう。またエルケセチェンもたとえば【第八葉】の裏面11行と16行のように、一部の対格 *i* を属格 *ü* として理解している。
- 10: 造格の *bar* (*ber*) と *iyar* (*iyer*) を厳密に使い分けていない。【第十葉】の裏面4行の *sedgel-ber* がその一例である。
- 33) リンチンのテキストでは *-bar* が欠けている (Rintchen 1959: 60)。
- 34) リンチンは *nigen kšan-dur olyayuluyçi* としている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは、*nigen gšan-dur olyuyuluyçi* としている (Erkesečen 1991: 37)。The Mongolian Maha avyutpatti では *sedkil-ün arban jiryuyan gšan-u ner-e anu* とある一句を Names of the sixteen moments of thought と訳している。別の箇所では *nigen-e gšan-a* とあり、in a moment との訳を付けている (Sarközi 1995: 97, 461)。
- 35) リンチンのテキストには *erdeni-yin* が欠けている (Rintchen 1959: 60)。
- 36) リンチンとエルケセチェンは *anggiĵiral* としている (Rintchen 1959: 60; Erkesečen 1991: 37)。
- 37) リンチンは *včirtu* としている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *vačirtu* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 38) エルケセチェンは *ölemei* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 39) リンチンのテキストでは *jalbarin* としている (Rintchen 1959: 60)。
- 40) エルケセチェンは *qong* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 41) エルケセチェンは *quvaray-ud-tur mörgümüi* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 42) リンチンのテキストでは *nereyidügsen* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンも *nereyidügsen* となおしている (Erkesečen 1991: 37)。
- 43) リンチンのテキストでは *simnus* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *silmüs-ün* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 44) リンチンのテキストでは *qariy-a yeketü doysin qar-a sülde čimadur takin mörgümüi* となっている (Rintchen 1959: 60)。
- 45) リンチンのテキストでは *yayaramyai* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *yayarmatayai* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 46) エルケセチェンは *čim-a-dur* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 47) リンチンのテキストでは *alm-a včirtu* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *du* を *tu* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 48) リンチンのテキストでは *ĵida-ban barin kilinglegsén* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *gilingnegsen* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 49) リンチンのテキストでは *ĵalayu čirai niyurtai* となつている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *čirai niyur-tur-iyán* としている。*čarai* はオルドス・モンゴル語口語発音である (Erkesečen 1991: 37)。
- 50) リンチンのテキストでは *ĵanggiduysan* となっている (Rintchen 1959: 60)。

- 51) リンチンのテキストでは *serbeyigsen* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *degegsite serbeyilgegsen* としている (Erkesečen 1991: 37)。
- 52) リンチンのテキストでは *jalayu boyda sülde* となっている (Rintchen 1959: 60)。
- 53) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 37)。*čimadur* はオルドス・モンゴル語口語発音である。
- 54) エルケセチェンはこの *mörgümü* をすべて *mörgümüi* に統一している (Erkesečen 1991: 37 他)。
- 55) リンチンのテキストでは *tur* で、エルケセチェンも *tur* になおしている (Rintchen 1959: 60; Erkesečen 1991: 38)。
- 56) リンチンのテキストでは *toyorin mingyan qar-a nidütei* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *nidü tei-yin tulada* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 57) リンチンは *niyuča ulus-i nigen-ber* としているが、別のテキストには *niyuča üiles-i nigen-ber* とあることをも指摘している (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *nigeken-čü* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 58) エルケセチェンは *tur* になおしている (Erkesečen 1991: 38)。
- 59) リンチンのテキストでは *niyur-tayan toyorin čimegtei* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *čimeg-tü* にしている (Erkesečen 1991: 38)。
- 60) リンチンのテキストでは *čayan* がいない (Rintchen 1959: 60)。
- 61) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 62) リンチンのテキストでは *küčütei* で、エルケセチェンも *küčütei* となおしている (Rintchen 1959: 60; Erkesečen 1991: 38)。
- 63) リンチンのテキストでは *sümir* となっている (Rintchen 1959: 60)。
- 64) リンチンは *sudarasun* の後に属格 *u* をつけたらうえ、*sudarasun-u ežen qayan qurmusta-yi* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *qormusta tengri-yi* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 65) リンチンのテキストでは *čayan* はない (Rintchen 1959: 60)。
- 66) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 67) リンチンのテキストでは *joriytai-yin* となっており、エルケセチェンも *joriytai-yin* になおしている (Rintchen 1959: 60; Erkesečen 1991: 38)。
- 68) リンチンのテキストでは *sangsar-tur* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは *sansar-tur* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 69) リンチンのテキストでは *yabuqu amitan* となっている (Rintchen 1959: 60)。エルケセチェンは複数形 *amitan nuyud* にしている (Erkesečen 1991: 38)。
- 70) エルケセチェンは *yeke-yin* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 71) リンチンのテキストでは *sakituyai* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 72) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 73) リンチンのテキストでは *simnus* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *silmüs-ün* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 74) エルケセチェンは *olan degedü* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 75) リンチンのテキストでは *-i* がいない (Rintchen 1959: 61)。
- 76) リンチンは *simnus* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *silmüs* としてい

- る (Erkesečen 1991: 38)。
- 77) リンチンのテキストでは *üneker sayitur butartal-a kiduyçi* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *ünen sayitur butartal-a kituyçi* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 78) リンチンのテキストでは *čayan* はない (Rintchen 1959: 61)。
- 79) ここで *takin mörgümüi* という一句が欠如している。エルケセチェンはここで *takin mörgümüi* を補足している (Erkesečen 1991: 38)。
- 80) リンチンのテキストでは *mital* となっており、エルケセチェンも *mital* となおしている (Rintchen 1959: 61; Erkesečen 1991: 38)。
- 81) エルケセチェンは *joriytai-yin* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 82) エルケセチェンは *nidün-iyer* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 83) リンチンのテキストでは *kilinglen* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 84) リンチンのテキストでは *simnus-i* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *silmüs-ün* としている (Erkesečen 1991: 38)。
- 85) リンチンのテキストでは *mölkügülangken* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 86) エルケセチェンは *kiskigsen* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 87) リンチンのテキストでは *čayan* がない (Rintchen 1959: 61)。
- 88) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 89) リンチンのテキストでは *doyšın sedkiltei* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *küçütei* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 90) *tongyuriy* とは刀の尊称である。リンチンのテキストでは *tongyuray* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 91) リンチンのテキストでは *jida-ban* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 92) リンチンのテキストには *kilinglejšü* はなく (Rintchen 1959: 61)、エルケセチェンは *kilingnejü* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 93) エルケセチェンは *tümen dayisun-u* と補足している (Erkesečen 1991: 39)。
- 94) エルケセチェンは *terigün-i oytulun* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 95) エルケセチェンは *mančuyulan* としている (Erkesečen 1991: 39)。リンチンのテキストでは、*…čerig-ün dayisun-i terigün-i oytulun molčuyulan erike bolyan jөгүgsen* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 96) リンチンのテキストでは *čayan* はない (Rintchen 1959: 61)。
- 97) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 98) リンチンのテキストでは *jobalangtu* となっており、エルケセチェンも *jobalangtu* になおしている (Rintchen 1959: 61; Erkesečen 1991: 39)。
- 99) リンチンのテキストでは *sakiqu* となっており、エルケセチェンも *sakiqu* になおしている (Rintchen 1959: 61; Erkesečen 1991: 39)。
- 100) リンチンのテキストでは *ünen degedü ridi* となっており、エルケセチェンは *olan degedü ridi* になおしている (Rintchen 1959: 61; Erkesečen 1991: 39)。
- 101) リンチンのテキストでは *qubilyaju* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *yaryaju* を *qobilyaju* になおしている (Erkesečen 1991: 39)。
- 102) リンチンのテキストでは *čayan* はない (Rintchen 1959: 61)。
- 103) リンチンのテキストでは、*čimadur* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェン

は *čimadur* になおしている (Erkesečen 1991: 39)。

- 104) リンチンのテキストでは *žaliqai buruyu omuytu* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 105) リンチンのテキストでは *doruyitayulun ečülgen* となっている。(Rintchen 1959: 61)。
- 106) リンチンのテキストでは *čayan* はない (Rintchen 1959:)。
- 107) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 108) リンチンのテキストでは *sülde* が欠けている (Rintchen 1959: 61)。
- 109) リンチンのテキストでは *kičiyegči* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 110) エルケセチェンは *omoytan-i* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 111) リンチンのテキストでは *buruyu yabudaltan-i doruyitayulun* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 112) リンチンのテキストでは *čayan* がない (Rintchen 1959: 61)。
- 113) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 114) リンチンのテキストでは *edüge* は欠けている (Rintchen 1959: 61)。
- 115) エルケセチェンは *šasin türü-dür* になおしている (Erkesečen 1991: 39)。
- 116) リンチンのテキストでは *mayu* がなく、かわりに *buruyu* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 117) エルケセチェンは *üiledügči* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 118) エルケセチェンは *kemten* としている (Erkesečen 1991: 39)。
- 119) リンチンのテキストでは *boluyad* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 120) リンチンのテキストでは *erdemten* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *erdemten* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 121) エルケセチェンは *čögegedübe* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 122) リンチンのテキストでは *šasin* が欠けている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *engke šasin türü-yi* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 123) エルケセチェンは *amurliyuluyči* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 124) リンチンのテキストでは *čayan* がない (Rintchen 1959: 61)。
- 125) エルケセチェンは *čim-a-dur* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 126) リンチンのテキストでは *qamuyčerig-ün dayisun-ud-i* となっている (Rintchen 1959: 61)。
エルケセチェンは *qamuy mayu dayisun* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 127) エルケセチェンは *toburay* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 128) リンチンのテキストでも *daruyči* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *gituyči* を *daruyči* にしている (Erkesečen 1991: 40)。
- 129) リンチンのテキストでは *masi doysin* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 130) リンチンのテキストでは *čayan* がない (Rintchen 1959: 61)。
- 131) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 132) リンチンのテキストでは *üjen yadaqui* となっている (Rintchen 1959: 61)。エルケセチェンは *yadayu* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 133) エルケセチェンは *jirüketen* としている (Erkesečen 1991: 40)。
- 134) リンチンのテキストでは *doruitayulun* が欠けている (Rintchen 1959: 61)。
- 135) リンチンのテキストでは *čayan* はない (Rintchen 1959: 61)。
- 136) エルケセチェンは *čimadur* としている (Erkesečen 1991: 40)。

- 137) リンチンのテキストでは *tusatu sayid-un qurim* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 138) エルケセチェンは *manduyuluyçi* としている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 139) ここで *çayan sülde çamadur takin mörgümüi:* との語句が欠落していると思われる。エルケセチェンは *tus ösiyeten-i eçülken daruyçi, boyda çayan sülde çamadur takin mörgümüi* とつけ加えている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 140) リンチンのテキストでは *edür-üd-ün* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 141) エルケセチェンは *nige uday-a* としている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 142) リンチンのテキストでは *eregül engke amuyulang jiryalang-iyar* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 143) リンチンのテキストでは *çay бүкүи-i nöğçiyen jud ügei sayin çay-un jun namur-iyar jiryaju* となっている (Rintchen 1959: 61)。
- 144) エルケセチェンは *nige uday-a* としている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 145) エルケセチェンは *degerem* としている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 146) エルケセチェンは *ber-e* としている (Erkeseçen 1991: 40)。1*beri* とは1本の法螺の音が聞こえる距離を指す。
- 147) リンチンのテキストでは *ali büri-yin ayuraltu doş sin dayisun qulayai degerem nuyud-i mingyan ber-e yin yajarça doruyitayulun buruyutayulju* となっている (Rintchen 1959: 61–62)。エルケセチェンは *buruyulaju* としている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 148) エルケセチェンは *sansar* としている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 149) リンチンのテキストでは *yaryaqui* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは *yaryaqu* としている (Erkeseçen 1991: 40)。
- 150) リンチンのテキストでは *tonilyayçi* となっている (Rintchen 1959: 62)。
- 151) エルケセチェンは *yayiqamsiytu* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 152) リンチンのテキストでは *sidetü.çayan* がない (Rintchen 1959: 62)。
- 153) エルケセチェンは *çamadur* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 154) リンチンのテキストでは *kimuraldun* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは *kimuraqu* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 155) リンチンのテキストでは *temeçeldeküi* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは *temeçeldükü-yi* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 156) リンチンのテキストでは *enelgetü* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは *kinal-tu* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 157) リンチンのテキストでは *silege* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは *silegen* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 158) リンチンのテキストでは *çar kitel-e* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは *çigeretel-e* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 159) リンチンのテキストでは *çayan* がない (Rintchen 1959: 62)。
- 160) エルケセチェンは *çamadur* としている (Erkeseçen 1991: 41)。
- 161) リンチンのテキストでは *eyimü* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは※※記号で表記している (Erkeseçen 1991: 41)。
- 162) リンチンのテキストでは *neretei* となっている (Rintchen 1959: 62)。
- 163) リンチンのテキストでは *nusu-ban* となっている (Rintchen 1959: 62)。エルケセチェンは

- nasu-ban* としている (Erkesečen 1991: 41)。
- 164) エルケセチェンは *jalbiramui* としている (Erkesečen 1991: 41)。
- 165) エルケセチェンは *ejin* を *ejen* に統一している (Erkesečen 1991: 41)。 *ejin* はオルドス・モンゴル語口語発音である。
- 166) エルケセチェンはここで *yerüngkei amitan-u sitügen boluysan, yirtinčü-yin deger-e sakiyulsun boluysan, sür-ün yeketü* としている (Erkesečen 1991: 41)。
- 167) エルケセチェンは *qayan* としている (Erkesečen 1991: 41)。
- 168) エルケセチェンの報告書にはこの一句が欠けている (Erkesečen 1991: 50)。
- 169) エルケセチェンは *qong kiy-a* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 170) エルケセチェンは *tengri deče* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 171) リンチンのテキストでは *deger-e yeren yisün tngri-deče sedüküi-dü* となっている (Rintchen 1959: 73)。
- 172) エルケセチェンは *yisügei* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 173) リンチンのテキストでは *yesükei bayatur-ača egüdküi-dü* となっている (Rintchen 1959: 73)。エルケセチェンは *tü* を *dü* にしている (Erkesečen 1991: 50)。
- 174) エルケセチェンは *suu jali* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 175) リンチンのテキストでは *yeke suu jali-yin ijayur-tu* となっている (Rintchen 1959: 73)。
- 176) エルケセチェンは *yirtinčü* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 177) エルケセチェンは *sutu* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 178) エルケセチェンは *debisger* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 179) エルケセチェンは *saylayar* としている (Erkesečen 1991: 50)。リンチンのテキストでは *Tungyalay Tuyula-yin yurban ulqun-a debsekü saylayar modun-u ijayur-ača* となっている (Rintchen 1959: 73)。『モンゴル秘史』第57節において、*saylayar modun* は、ハーンの即位と結びつく形で現れる (Eldengtei & Ardajab 1986: 104)。オルドスにある八白宮の祭祀者ダルハドの伝承では、*saylayar modun* は、チンギス・ハーンが帝釈天より授かった「黒いスゥルデ」を受け取った聖なる樹となっている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983: 281-282, 299)。
- 180) リンチンのテキストでは *türüldügsen* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 181) エルケセチェンは *degüü ner* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 182) リンチンのテキストでは *döčin tümen-degen sülde boluysan, dörben költü yeke qara sülde* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 183) エルケセチェンは *yirtinčü* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 184) リンチンのテキストでは *suutu boyda-yin yisün örlüg-ün* となっている (Rintchen 1959: 74)。エルケセチェンは *yisün örlüg-üd* としている (Erkesečen 1991: 50)。
- 185) エルケセチェンは *yerüngkei* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 186) リンチンのテキストでは *sülde* を *sitügen* としている (Rintchen 1959: 74)。
- 187) エルケセチェンは *yisün köl-tü* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 188) リンチンのテキストでは同じく *čayan tuy* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 189) エルケセチェンの報告書にはこの一句が欠けている (Erkesečen 1991: 51)。
- 190) エルケセチェンは *bolju* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 191) エルケセチェンは *erdenis* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 192) エルケセチェンは *muquli güi vang čingsang-bar* としている (Erkesečen 1991: 51)。

- 193) リンチンのテキストでは *Muquli goi ong čingsang-dur* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 194) エルケセチェンは *alaman* にしている (Erkesečen 1991: 51)。
- 195) エルケセチェンは *tu* にしている (Erkesečen 1991: 51)。
- 196) リンチンのテキストでは *almas erdeni metü jürüketü, altan mönggün erdenis-iyer čimegtei* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 197) リンチンのテキストでは *...dür takin mörgümü* はない (Rintchen 1959: 74)。
- 198) エルケセチェンは *namur-un* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 199) エルケセチェンは *naran saran metü* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 200) リンチンのテキストでは *narmai ulus-un ejen boluysan* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 201) エルケセチェンは *dü* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 202) エルケセチェンは *doroyitayuluyçi* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 203) エルケセチェンは *narmai* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 204) リンチンのテキストでは *Nasu büri dayisun-i daruyçi, namiy-a yeketü boyda sülde* となっており, *takin mörgümü* はない (Rintchen 1959: 74)。
- 205) エルケセチェンは *örüge* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 206) エルケセチェンは *yeketü* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 207) エルケセチェンは *muquli* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 208) リンチンのテキストでは *qoyar* は欠けている (Rintchen 1959: 74)。
- 209) エルケセチェンは *nökür tü* としている (Erkesečen 1991: 51)。
- 210) エルケセチェンは *jayayabar* にしている (Erkesečen 1991: 51)。
- 211) リンチンのテキストでは *qotad balyad* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 212) エルケセチェンは *du* にしている (Erkesečen 1991: 51)。
- 213) エルケセチェンは *öljeyitü* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 214) エルケセチェンは *boyda* の後ろに *ejen-ü* とのことばをつけ加えている (Erkesečen 1991: 52)。
- 215) リンチンのテキストでは *...dür takin mörgümü* は欠けている (Rintchen 1959: 74)。
- 216) リンチンのテキストでは *odutan tngri-děče* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 217) エルケセチェンは *jayayabar* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 218) リンチンのテキストでは *töblen* は欠けている (Rintchen 1959: 74)。
- 219) エルケセチェンは *omoytan* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 220) エルケセチェンは *čim-a-dur* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 221) リンチンのテキストでは *čamadur takin mörgümüi* は欠けている (Rintchen 1959: 74)。
- 222) エルケセチェンは対格 *i* を省略している (Erkesečen 1991: 52)。
- 223) リンチンのテキストでは *ulus-un ejen Činggis qayan-dur* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 224) リンチンのテキストでは *olun Tayijiyud* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 225) リンチンのテキストでは *čayan* がなく, *boyda sülde* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 226) エルケセチェンは *čim-a-dur* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 227) リンチンのテキストでは *čamadur takin mörgümüi* はない (Rintchen 1959: 74)。
- 228) リンチンのテキストでは *Bürte üsin-i* となっている (Rintchen 1959: 74)。エルケセチェンは対格 *i* をつけ加えている (Erkesečen 1991: 52)。

- 229) エルケセチェンはこの対格 *i* を削除している (Erkesečen 1991: 52)。
- 230) リンチンのテキストでは *dayuliysan-dur* となっている (Rintchen 1959: 74)。エルケセチェンは *dayuliysan* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 231) 『モンゴル秘史』第105節と109節において、ブーラ・ケーレという地名はチンギス・ハーンの夫人ボルテがメルケト部にさらわれ、またチンギス・ハーンらによって奪還される場所に表れる (Eldengtei & Ardaĵab 1986: 256; 271)。この点から、祭史 (*öcig*) というテキストは、多くの祭祀者ダルハトが語るように、「歴史」に基づいて書かれていることがわかる。
- 232) リンチンのテキストでは *bultarayulul* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 233) エルケセチェンは *üiletügci* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 234) リンチンのテキストでは *boyda eĵen-u yeke sülde* となっている (Rintchen 1959: 74)。
- 235) エルケセチェンは *sandurayulun* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 236) エルケセチェンは *on-u* としている (Erkesečen 1991: 52)。
- 237) エルケセチェンは *tur* を *dur* にしている (Erkesečen 1991: 52)。リンチンのテキストでは *sayibar ĵaruysan ĵayun elcis-iyen sartayul-un ĵalalĵin sultan qayan-a ükügülgösen dür, sayaral ügei doluyan on ayalan yabuqui-dur* となっている (Rintchen 1959: 74)。なお、このいわゆる「七年戦争」とは、1219年から1225年までのチンギス・ハーンによる中央アジア遠征を指すものである。『モンゴル秘史』第264節では、*sartayul irgen-dür doluyan od yabuĵu* とある (Eldengtei & Ardaĵab 1986: 877)。また、『モンゴル秘史』では *Ĵalalding sultan* となっている (Eldengtei & Ardaĵab 1986: 856–857 他)。
- 238) リンチンのテキストでは *sanduyulun* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 239) リンチンのテキストでは *takin mörgümüi* はない (Rintchen 1959: 75)。
- 240) リンチンのテキストでは *qar-a Tangyud-tur* となっている (Rintchen 1959: 75)。オールドス・モンゴルは今でも *Tangyud* と *Töbed* を全く同じ意味で使用する。
- 241) エルケセチェンは *mordaqui-dur qaryam* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 242) エルケセチェンは *aduyun* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 243) エルケセチェンは *abquyuluysan* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 244) エルケセチェンは *bögüde-yi* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 245) リンチンのテキストでは *qar-a sülde* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 246) リンチンのテキストでは *takin mörgümüi* はない (Rintchen 1959: 75)。
- 247) エルケセチェンは *oyirad* としている (Erkesečen 1991: 53)。ハスピリクトとエルケセチェンによると、オールドスの古い文献ではオイラトを *orud* と書くことが多いという。
- 248) リンチンのテキストでは *türidkel ügei* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 249) エルケセチェンは *öggügci* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 250) 原文ではこれを消している。
- 251) エルケセチェンは *lüge* になおしている (Erkesečen 1991: 53)。
- 252) リンチンのテキストでは *döcün tümen-degen kücün nemeĵü* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 253) エルケセチェンは対格 *i* を属格 *ü* にしている (Erkesečen 1991: 53)。
- 254) エルケセチェンは *terigün* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 255) リンチンのテキストでは *tüg tümen-ü terigün boluysan* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 256) リンチンのテキストでは *čayan* と *takin mörgümüi* はない (Rintchen 1959: 75)。

- 257) リンチンのテキストでは *qar-a ayula-yi činu gajilan yabuqui-dur* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 258) エルケセチェンは *tögeren* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 259) リンチンのテキストでは *qatan čerig-i činu tukirun yabuyci* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 260) エルケセチェンは *i* を *yi* になおしている (Erkesečen 1991: 53)。リンチンのテキストでは *qar-a sülde* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 261) リンチンのテキストでは *eke qadayatu* はない (Rintche 1959: 75)。エルケセチェンは *yadayatu* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 262) エルケセチェンは *öcünem* をすべて *öcinem* に統一している (Erkesečen 1991: 53, 54)。
- 263) エルケセチェンは *ayula-yi* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 264) リンチンのテキストでは *öndür ayula-yi činu ölgelen yabuqui-dur* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 265) エルケセチェンは *ömci-t* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 266) エルケセチェンは *ači-nar* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 267) リンチンのテキストでは *öndür sülde-yi qadayalan yabuyci, ömçitü ayul ači-nar činu mörgün öcinem* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 268) エルケセチェンは *siry-a* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 269) エルケセチェンは *ajiry-a* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 270) エルケセチェンは *bolyaysan* としている (Erkesečen 1991: 53)。
- 271) リンチンのテキストでは *keger-e ajiry-a-yin kökül-iyer kelkiy-e boluysan, gelkü bügüde-yin ežen boluysan* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 272) エルケセチェンは *kingüi* にしている (Erkesečen 1991: 54)。
- 273) エルケセチェンは *öggügçi* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 274) リンチンのテキストでは *čayan* と *takin mörgümüi* がない (Rintchen 1959: 75)。
- 275) エルケセチェンは *ajiry-a* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 276) エルケセチェンは *bolyaysan* としている (Erkesečen 1991: 54)。リンチンのテキストでは *qar-a ajiry-a-yin kökül-iyer qolbuγ-a boluysan* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 277) エルケセチェンは *qaramaqai* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 278) リンチンのテキストでは *qaskiruy-a yeketü qatan ulayan büriy-e, qaralmai bügüde uriy-a boluysan* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 279) エルケセチェンは *dorayitayuluyçi* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 280) リンチンのテキストでは *qariy-a yeketü qar-a sülde-yin joriy medetügei* となっている (Rintchen 1959: 75)。以下、両テキストの文の順番は不同である。
- 281) エルケセチェンは *ečülken* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 282) エルケセチェンは *i* を *yi* にしている (Erkesečen 1991: 54)。
- 283) エルケセチェンは *čindamuni* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 284) リンチンのテキストでは *qatud köbegüd* となっている (Rintchen 1959: 75)。『モンゴル秘史』では、*köbegün* は王子を指す言葉として現れる (Eldengtei & Ardajab 1986: 902–903)。
- 285) エルケセチェンは属格 *ü* にしている (Erkesečen 1991: 54)。
- 286) エルケセチェンは *bolyayçi* としている (Erkesečen 1991: 54)。

- 287) エルケセチェン は *yabiyatu* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 288) エルケセチェン は *bolıyayçı* としている (Erkesečen 1991: 54)。リンチンのテキストでは *gamuy ulus-tayan yabiy-a-tu boluyçı* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 289) エルケセチェン は *yin* を省略している (Erkesečen 1991: 54)。
- 290) エルケセチェン は *yi* を省略している (Erkesečen 1991: 54)。
- 291) エルケセチェン は *dobdolaqui* としている (Erkesečen 1991: 54)。リンチンのテキストでは *öndür ayula-yin emün-e üyimen dobtulqui* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 292) リンチンのテキストでは *ökid köbegüd* のように複数形となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 293) エルケセチェン は対格 *i* を属格 *ü* になおしている (Erkesečen 1991: 54)。
- 294) エルケセチェン は *bolyaqui* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 295) エルケセチェン は *açi nar* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 296) リンチンのテキストでは *öber-ün çinu ayul açi üres inu ergün öcinem* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 297) エルケセチェン は *öljeyitü* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 298) リンチンのテキストでは *boyda sülde-yin joriy medetügei* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 299) エルケセチェン は *açi nar* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 300) リンチンのテキストでは *qan ayul açi-nar çinu, qaraçu ulus irgen çinu mörgün öcinem* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 301) エルケセチェン は *yaryalan* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 302) エルケセチェン は *yabuqui-du* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 303) エルケセチェン は *tü* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 304) エルケセチェン は *künesü* としている (Erkesečen 1991: 54)。*künisü* はオルドス・モンゴル語口語発音である。
- 305) エルケセチェン は *jayayayçı* としている (Erkesečen 1991: 54)。
- 306) リンチンのテキストでは *qayir obuy-a-yi niyun yabuqui-dur genedkegöljü, qayarqai amandur künesün, qalturiqai köl-dür kölje jayayaqui-yi qariy-a yeketü qar-a sülde-yin joriy medetügei* となっている (Rintchen 1959: 75)。
- 307) エルケセチェン はこの一句を省略している (Erkesečen 1991: 54)。リンチンのテキストではさらに40行ほどの文が続く (Rintchen 1959: 75-76)。
- 308) エルケセチェン は *bodisduu-a* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 309) エルケセチェン は *ayar* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 310) エルケセチェン は *tegüsügsen* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 311) エルケセチェン は *sakiyulsun* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 312) エルケセチェン は *nöküd-ner* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 313) エルケセチェン は *dur* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 314) エルケセチェン は *oyuu* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 315) エルケセチェン はここで *tülejü* とつけ加えている (Erkesečen 1991: 42)。
- 316) エルケセチェン は *jayayan* としている (Erkesečen 1991: 42)。
- 317) エルケセチェン はここで *açi-bar* をつけ加えている (Erkesečen 1991: 42)。
- 318) エルケセチェン は *jedgür-ün* としている (Erkesečen 1991: 42)。

- 319) エルケセチェンが *i* を *yi* にしている (Erkesečen 1991: 42)。
 320) エルケセチェンが *ami nasu-yi* としている (Erkesečen 1991: 42)。
 321) エルケセチェンが *urtudq-a* としている (Erkesečen 1991: 42)。
 322) エルケセチェンがここで対格 *i* をつけ加えている (Erkesečen 1991: 42)。
 323) エルケセチェンの報告書にはここからさらに40行ほど別の内容がある。ハスピリクトの文書にはない (Erkesečen 1991: 43-45)。
 324) エルケセチェンが *ama-yi* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 325) エルケセチェンが *qaram* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 326) エルケセチェンが *silege-yi* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 327) エルケセチェンが *ayči* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 328) エルケセチェンが *bolyayči* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 329) エルケセチェンが *takiju* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 330) エルケセチェンが *kümün-i öljei* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 331) エルケセチェンが *mendü* としている (Erkesečen 1991: 45)。
 332) 以下4行は、毛筆で塗りつぶしてあり、大半は判読不明である。*Bandzar* という、人名らしきもののみ確認することができる。

文 献

Altanorgil

- 1986 Isegei Toyuryatan-u Qamuy Beleg-i Bütügegči Jum-a Qorim-un Yisün Yosun (モンゴル文「遊牧民の最も幸ある大宴——ジュマ宴の九つの儀礼」)『内蒙古大学学报』(蒙文版) 2, 25-29。

Bayan-a, B. (校注)

- 1984 *Asarayči Neretü-yin Teüke* (モンゴル文『アサラクチ史』) 北京: 民族出版社。

Bou Šan

- 1988 *Ordus-un Erkegüd Oboytan-u Tuqai* (モンゴル文『オルドスのエルクト部について』) 東勝: 内蒙古伊克昭盟檔案館。

Čayan, D.

- 1992 *Sönid-ün Ĵang Ayali* (モンゴル文『スニト風俗誌』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

Čingel

- 1992 *Mongol Yos Ĵansilin Iq Tailbar Toli* (モンゴル文『モンゴル風俗習慣辞典』) Ulaanbaatar: Hühüdiin Hebleliin Gatzar。

Čoyiji (校注)

- 1983 *Altan Tobči* (モンゴル文『黄金史』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

Dharm-a

- 1987 *Altan Kürdün Mingyan Kegesütü* (モンゴル文『金輪千輻』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

Eldengtei & Ardajab

- 1986 *Mongyol-un Niyuča Tobčiyān-Seyiregülül Tayilburi* (モンゴル文『モンゴル秘史——還原注釈』) 呼和浩特: 内蒙古教育出版社。

Erkesečen

- 1989 “Yisün Költü Čayan Tuy”-un Tuqai Ĵöblelge (モンゴル文「九脚の白いスゥルデに関する考察」)『内蒙古社会科学』(蒙文版) 3, 43-53。
 1991 *Altan Sülde-yin Tayily-a* (モンゴル文「黄金スゥルデの祭祀」)『烏審旗文史資料』15, 政協烏審旗文史委整理。

Farquhar, D. M.

- 1970 Some Technical Terms in Ch'ing Dynasty Chinese Documents Relating to the

- Mongols. In Louis Ligeti (ed.) *Mongolian Studies*, 119–127. Budapest: Akademiai Kiado.
- Françoise, A.
1972 Le Père Aontaine Mostaert. *T'oung Pao* (通報), Vol. LVIII, 218–220. Leiden: The Netherlands.
- Fülungy-a & Amurmendü, L.
1993 *Üjümüčin-ü Jang Ayali* (モンゴル文『ウジュムチン・モンゴル族の風俗習慣』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- 外務省アジア局中国課
1992 『モンゴル月報』第220号。
- 韓儒林
1982 「元代詐馬宴新探」『穹廬集——元史及西北民族史研究』pp 247–254, 上海: 上海人民出版社。
- 江 實 (訳注)
1940 『蒙古源流』東京: 弘文堂。
- ハルヴァ, ウノ
1991 『シャマニズム』田中克彦訳, 東京: 三省堂。
- Heissig, W.
1984 Unbekannte Cinggis Khan-Thanka? *Zentral Asiatische Studien* 17, 19–26. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Humphrey, C.
1979 The Uses of Genealogy: A Historical Study of the Nomadic and Seden-tarised Buryat. *Pastoral Production and Society*, 235–260. Cambridge: Cambridge University Press.
- 忽思慧撰
『飲膳正要』(四部叢刊統編子部, 出版年不明)。
- 井上 治
1992 「《チャガン・テウケ》の二つの系統」『東洋学報』73(3・4), 1–24。
- Жамцарано, ц.
1961 Культ Чингиса в Ордосе. *Central Asiatic Journal*, Vol. VI, 194–234. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Ĵimbadorji
1984 *Bulur Toli* (『水晶鑑』). 北京: 民族出版社。
- 小林高四郎
1957 「モンゴル人の歳月名に就いて」『民族学研究』21(1・2), 55–65。
- Krader, I.
1963 *Social Organization of the Mongol-Turkic Pastoral Nomads*. Indiana University.
- 留金鎖 (整理注釈)
1981 *Arban Buyantu Nom-un Čayan Teüke* (モンゴル文『十善白史』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Lubsangčoyitan
1981 *Mongyol-un Jang Ayali-yin Üilebüri* (モンゴル文『モンゴル風俗鑑』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- 松原正毅
1991 「遊牧社会における王権」『王権の位相』pp. 415–441, 東京: 弘文堂。
『*Mongyol Ulus-un Ündüsün Qauli*』
1992 Ulaanbaatar.
- 森川哲雄
1990 「オルドス部の清朝帰順をめぐる」『歴史学・地理学年報』14, 49–72。
1997 「サガン・セチェンと『蒙古源流』の編纂」『比較社会文化』3, 101–115。
- Mostaert, A.
1934 *Ordosica*. Bulletin of The Catholic University of Peking 9, 1–96.
1941 *Dictionnaire Ordos*. Tome Premier (A–I), The Catholic University Peking.
1942 *Dictionnaire Ordos*. Tome Premier (J–Z), The Catholic University Peking.

- 1956 Introduction. *Erdeni-yin Tobči*, Mongolian Chronicle by Sayang Sečen, Part I, Harvard-Yenching Institute Scripta Mongolica 2. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 1957 Sur le Culte de Sayang Sečen et de Son Bisaieul Qutuγtai Sečen Chez les Ordos. *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 20. pp. 534-566, Harvard-Yenching Institute.
- モスタールト, A.
1986 「オルドス・モンゴルに関する民俗資料」『モンゴル研究』17, 81-106。
- 村上正二
1977 『モンゴル秘史』1 (訳注) 東洋文庫163, 東京: 平凡社。
1976 『モンゴル秘史』3 (訳注) 東洋文庫294, 東京: 平凡社。
- Na Ta
1989 *Altan Erike* (『金鬘』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Namjildorji
1992 *Ordus Ĵang Üile-yin Tobči* (モンゴル文『オルドス風俗鑑』) 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- Namjilm-a (整理)
1994 *Qorin Naimatu Tayilburi Toli* (モンゴル文『二十八卷本辞典』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Narasun, S.
1989 *Ordus-un Ĵang Ayali* (モンゴル文『オルドス風俗誌』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
1993 Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu-yin Ügülekü Ni (モンゴル文「チンギス・ハーンの八白宮について」) 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 6, 42-60。
- Narasu & Almas, S.
1994 *Urad-un Ĵang Ayali* (モンゴル文『ウラト・モンゴル族の風俗習慣』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Nayuyisayinküü
1988 *Mongyol-un Ĵum-a Qorim-i Sin-e-ber Tayilburilaqu Ni* (モンゴル文「モンゴルのジュマ宴に関する新しい解釈」) 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 3, 132-143。
- Poppe, N.
1971 Antoine Mostaert, C.I.C.M.. *Central Asiatic Journal*, Vol. XV (3), 164-169. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Qasbiligtu
1984 *Ordus-un Qorim* (モンゴル文『オルドス・モンゴルの結婚儀礼』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Qurča (bilig), N.
1988 Erten-ü Mongyol Sara-yin Ĵarim Nereyidül-ün Učir (モンゴル文「古代モンゴルの月名」) 『内蒙古図書館工作』3(4), 5-18。
1994 Erten-ü Mongyol-un Yamu Tügegekü Yos-u Tuqai Angqan-u Sudulul (モンゴル文「古代モンゴルのヤム分配に関する初歩的考察」) 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 3, 40-47。
- Qurčabayatur, S.
1992(90) *Qatagin Arban yurban Atay-a Tengri-yin Tayily-a* (モンゴル文『ガタギン・十三アタガー・テンゲル祭』) 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- Qurčabayatur, S. & Üjüm-e, Č.
1991 *Mongyol-un Böge Mörgül-ün Tayily-a Takily-a-yin Suyul* (モンゴル文『モンゴルにおけるシャマニズム祭祀文化』) 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- ホルチャバートル&楊海英
1997 「モンゴルの祭祀用絵画について——新発見の八白宮所蔵絵画——」『内陸アジア史研究』12, 69-77。
- Rasipungsuy
1985 *Bulur Erike* (モンゴル文『水晶珠』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Rintchen, B.
1959 *Les Materiaux Pour L'Étude du chamanisme Mongol*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz 3.

- 1975 *Materiaux Pour L'Étude du chamanisme Mongol*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz 40.
Sayang Sečen
1956 *Erdeni-yin Tobči* (Introduction by Antoine Mostaert), Part II, Part III, Part IV, Harvard-Yenching Institute Scripta Mongolica 2. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Sayinjiryal
1992 Čayan Sülde Kiged Tegün-ü Tayily-a (モンゴル文「白いスゥルデ及びその祭祀」)『内蒙古社会科学』(蒙文版) 5, 29-38.
- Sayinjiryal & Šaraldai
1983 *Altan Ordun-u Tayily-a* (モンゴル文『黄金オールドの祭祀』) 北京: 民族出版社。
- Sarközi, A.
1995 *A Buddhist Terminological Dictionary* (The Mongolian Maha vyutpatti). Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- Serji, Ĵ.
1993 Mongyol Oboy-un Ner-e Egüskü Ĵarim Ončaliy (モンゴル文「モンゴルのオボク名の発生過程における特徴」)『内蒙古社会科学』(蒙文版) 4, 48-54.
- Serruys, H.
1974a *Kumiss Ceremonies and Horse Races-Three Mongolian Texts*. Asiatische Forschungen, Band. 37. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
1974b *Four Manuals For Marriage Ceremonies Among the Mongols*. *Zentral Asiatische Studien* 8, pp. 247-331. Wiesbaden: Kommissionsverlag Otto Harrassowitz.
1975 *A Catalogue of Mongol Manuscripts From Ordos*. *Journal of the American Oriental Society*, vol. 95, pp. 191-208. Columbia University.
- 宋濂
1992(76) 『元史』(第七冊) 北京: 中華書局。
- Sonom
1984 Keyimori-yin Tuqai Tobči Sinjilege (モンゴル文「キ・モリに関する一考察」)『内蒙古社会科学』(蒙文版) 1, 152-170.
1993 *Mongyolčud-un Sigüsü Talbiqū Yosun* (モンゴル文『モンゴル族肉食文化』) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Suyul, N.
1992 Činggis Qayan-u Kölüg Buyurči Noyan-u Ger-ün Üye-yin Bičimel (モンゴル文「チンギス・ハーンの駿馬ボウルジュ・ノヤンの家系譜」)『内蒙古社会科学』(蒙文版) 2, 46-71.
- Tümenjiryal, D.
1989 *Han Höhüi Uulin Hošuu—Öndörhangai Sum* (モンゴル文『ハン・ホフイ・ウーラ旗——ウンドゥル・ハンガイ・ソム』) ウラーン・ゴム。
- ウラジミルツォフ
1941 『蒙古社会制度史』外務省調査部訳, 東京: 生活社。
- Van Hecken, J. L.
1963 *Les Lamaseries D'Otoy (Ordos)*. *Monumenta Serica*, vol. XXII(1), pp. 121-167.
- Vangjil, B.
1991 *Köke Ĵula—Mongyol Ulamjilaltu Amidoral-un Toli* (モンゴル文『青い灯明——モンゴル族風俗習慣辞典』) 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- 和田 清
1959 『東亜史研究』(蒙古篇) 東京: 東洋文庫。
- 箭内 互
1930 「蒙古の詐馬宴と只孫宴」『蒙古史研究』pp. 945-956. 東京: 刀江書院。
- 楊海英
1995a 『オルドス・モンゴル族の社会構造——ヤスの機能とその歴史的変容——』(博士学位申請論文) 総合研究大学院大学。
1995b 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『内陸アジア史研究』10, 27-54。
1997 「オルドス・モンゴルの祖先祭祀——末子トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連を中心

に」『国立民族学博物館研究報告』21(3), 635-708。

1998 『「金書」研究への序説』国立民族学博物館調査報告7。

楊家駱（主編）

1967 『元詩選』上・下（中国學術名著第三輯・歷代詩文總集第二期書）台湾：世界書局。

Yöngrinorbu

1986 Ügüsin Qosiyu-u Vang-un Üye Jalyamjilaysan Toyimo ba Qosiyu Qariya Sumu Egürge Tusiyal Alban Yosü Jerge（モンゴル文「ウーシン旗歴代旗王の系譜及び旗・ハラー・ソム制度，各種賦役について」）中国人民政治協商會議内蒙古伊克昭盟委員会文史資料研究委員会編『伊克昭文史資料』第一，pp. 92-101，東勝：内蒙古鄂爾多斯報社印刷。

吉田順一

1980 「北方遊牧社会の基礎的研究——モンゴルのステップと家畜」『中国前近代史研究』（栗原朋信博士追悼記念）pp. 235-259，東京：雄山閣。

趙爾巽等撰

1976 『清史稿』（第二八，四七冊）北京：中華書局。

『周書』（第三冊）

1971 北京：中華書局。